



マーシャル方面遺族会
 (旧ウェゼリン方面戦没者慰霊会)
 〒103 東京都中央区
 日本橋人形町1-8-2
 電話 03-3661-8760
 FAX 03-3661-6241
 振替口座東京0-93487 番
 編集兼発行人 佐藤宗丕

平成七年度

慰霊祭 総会 直会の御案内

会長 佐藤 宗 丕

会員並びに会友の皆様にはお健やかに新しい年をお迎えのこととお慶び申しあげます。

恒例の慰霊祭と総会を次の通り行いますのでお知り合いの方々をお誘い合せ御参集下さい。

日 時 平成七年四月八日(土)

午前九時集合 靖國神社参集所前

慰 霊 祭 午前十時 昇殿 参拝

総 会 午前十一時 靖國會館二階

議 題 諸報告・会務計画・予算・役員改選

◎本号に同封した私製はがきには、慰霊祭に参加しない方も必ず全部の欄に記入して二月末日迄に御投函下さい。

◎会員名簿訂正に関係ある事項は特に正確にお書き下さい。

◎宿泊、直会、座談会(24頁)のお申し込みは、同封のはがきにお書き下さい。

◎総会終了後(凡そ十二時頃)より、靖國會館二階で直会を行います。参加費は一人三〇〇円とします。

(以下24頁へ)



ハワイの太平洋国立記念墓地

目 次

平成七年度 慰霊祭 総会 直会 の御案内 会長 佐藤 宗丕	2
五十年を顧みて(三)	2
石谷 典夫 斎田ヨシエ	
金子庄之助 奥村ムツミ	
平林 和夫 佐竹 エス	
安室 慶二 高橋 吉正	
山田 正三 石澤 洋子	
岩佐 とみ 植川 二男	
高田源次郎	
五十年祭現地慰霊	11
五十年祭現地慰霊に参加して	12
石川 正興 小島 温	
片山 計 松永タツ子	
吉田 正次 富田 ミツ	
青山 次則 山内 正隆	
ウオツゼ、マロエラップに眠る 戦友を訪ねて：秋元 輝夫	17
環礁「ミレー抄」(19)	18
お便りの中から	19
山中 美子 田島智恵子	
佐藤 敬義	
計 報	19
明治天皇とハワイ皇帝カルカウ	20
ア……………勝部 真長	20
靖國神社便り	21
千鳥ヶ淵戦没者墓苑	21
秋季慰霊祭	22
寄付者芳名	23
五十年祭記念誌刊行について	23
名簿訂正	23
「環礁」座談会の予告	24
本部便り	24

五十年を顧みて(三)

兄の遺書

東京都 石谷 典夫

兄との最後の別れは昭和十八年十二月十二日昼頃であった。この日、東京駅八重洲口の通路から東海道線の展望車、最後尾デッキに若い三人の憲兵が南方前線に向け壮途に就いた。その真中にいた兄はハンカチを手に見えなくなるまで見送りの家族に大きく輪を描くように振り続けていた。

あれから五十一年近く経た今日でも、その光景は昨日の出来事のように鮮明に脳裡に刻まれている。



時に私は数え年十六歳であった。戦死後、憲兵中佐、宮崎有恒南洋憲兵隊

長から父宛に二月二十六日付の甲文が寄せられた。美濃紙にカーボン複写、こより綴じとなっており丁寧なもので私印まで押されているが、まず前線が本人が書かれたものとは思われず、憲

兵隊か、陸軍省かの、その職責に当る人が代筆したものか推察される。この文によると南洋憲兵隊という軍の組織はそれまでになく新設されたと明記されており、兄はその要員の一人として十二月二十九日に到着(クエゼリンより後方の基地と思われる——パラオか?)「更に一月二十三日クエゼリン島二進駐、連日ノ空襲下克ク陸海諸部隊ノ信頼ヲ受ケ任務ヲ完遂セラレアリ候」とある。

筆まめの兄は東京を發つたあと何通かの手紙を寄せているが、これを読むと明るい希望と快活さに満ちており、これが一転して後掲の手紙となった。

事実上の遺書である。発信地は軍機上、横須賀郵便局気付第ウ五〇ウ〇〇(憲)で日付は昭和十九年一月六日となつている。この「遺書」は東京大空襲直前に、都下西多摩郡に在る親戚に他の重要書類、写真等と共に疎開させてあつたためB29の火焰から免れたが、当時住んでいた千駄ヶ谷の家は五月二十五日から二十六日にかけての大空襲により焼失、すべて灰燼に帰した。

尚、兄の手紙は現在まで親類縁者以外、殆ど見せたことがなかったが(一)さきに五十回忌の法要をすませたこと。

(二)靖國神社での五十年祭もと、こおりなく行なわれたこと。

(三)今夏、悲願であつた現地慰霊墓参も叶つたこと。

(四)公表する場が遺族会の会誌であること、等々を考慮し、私の責任において發表したものである。また旧漢字はそのまゝにして提出した。

陸軍憲兵学校、更には憲兵分隊勤務当時の貴重な写真、文書と共に後世、子々孫々まで伝えるべく責任を以つて保管している。

拝啓 其の後父上様始め皆様には御褒りなく御過しにて候や、東京の一月の最中燃料不足と併せ何かと御不由の事多きと存じ深く深念仕り候

降つて自分事御蔭にて無事第二の目的地なる表記に安着仕り候間他事御休心下され度數日後には最後の目的地たる最東端に向け出発する予定に有之候

日米決戦正に本年に在り、もとより生還は期せざる覺悟、御両親様に於かせられても萬一の場合決して御取乱し無き様願上候、齡二十五を數ふる今日迄海よりも深く山よりも高き御恩、慈愛溢れる御心盡しの萬分の一にも報ゆる事堪わざりし不幸の子を何卒御許し下され度されど今は只盡忠報國一身を大君に捧げ敵米英を討ち邦家を磐石の安きに置く大東亜の礎石として一意専心軍務に精勵仕り必ずや御期待の萬分の一に副ふ覺悟に有之候

然れどももとより戦闘を主体とする兵科に非らず大戦果の蔭に黙々として緑の下の力持となるに過ぎず然し其れ

なくしてはあの赫々たる花々しき戦果擧がらざる事を充分御推察下され、正雄兄の如き殊勲甲の手柄を爲すに堪はざりし場合にも「不甲斐無き兵」との御怒りなき様伏して御願仕り候

弟妹の事に関し長男として御相談相手にもならず誠に申譯なき次第と存じ居り候へども何卒各自の適性に応じ充分御奉公出来得る人物に御仕立下さる様御配慮願上候

典夫、貞夫、浩子、出征に先立ち申し残せし事よく、忘れまじく留守中は兄の分まで孝養を盡され度、特に典夫は責任重大なるを思ひ充分なる決心をする様申し付け置き候、尚小机の叔父叔母、小野様始め近隣の皆様には幼き頃より何くれとなく御世話に相成候へば宣敷く御傳言願上候

任地は交通不便にして文通もま、ならぬと存じ候へ共無事御奉公仕りある間は幸便に言寄せ出来得る限り近況御報告致す所存に有之候へば内地の情况等御蔭の折御便り下されば幸甚と存じ居り候 先は右出發に際し一筆申し上げ所懐の一端を申述べ候

厳寒の折益々御自愛專一に爲される様切に御祈り申上候 尚、山口様始め産業戦士の方々には「二機でも多く」前線へを新聞紙上、或はラヂオ・ニュースで見聞するだけでなく直に実行に移される様切に御願

申上げ居りして御傳へ願ひ度御願申上候 敬 具

兄の思い出

新潟県 齋田 ヨシエ

私が三歳の頃兄に背負われて、夕日の沈む日本海を眺めていた様な記憶がいまだにありありと思ひ出されます。それは海辺の小高い丘に台場があり、日本海海戦に備えて大砲を据えたと云う因縁の場所だった様に思います。

兄が私のところに最後に面会に来てくれたのは、十七年の私が専門学校一年生の秋で満州から訪ねて来てくれ、優しい言葉をのこして帰って行った。その後卒業も間近の二月二十六日教官室前の黒板に「クエゼリン、ルオット両島守備部隊全員戦死」と掲示されました。

戦争が終つて二十一年二月頃「田中敏遺族殿」宛の通信があり、はじめて兄の玉碎を知らされました。

終戦になつてからの知らせでしたので父母家族共無念の思ひでした。

父は、地方の遺族会の会長をしてそれが生き甲斐でしたが、二十五年前に旅立ちその後は、兄の遺品は故郷の家を継いだ者が大切に保管しています。

お届け下さった「環礁」は、兄を偲ぶよすがとなり、会の役員様、会友さん、遺族の方々にお会いしますと、生きる力が湧いて来ます。

今後共感謝しながら、平和の礎となられた方々を祀りながら生活していき

たいと思つております。

◇ ◇ ◇

先がけて咲きし靖國の桜花散るも潔しか胸悼みくる

日本海の赤く燃ゆる陽にま向ひて吾を背負ひし兄を偲ばゆ

海を好み泳ぎ得意のわが兄よ松花江辺に憩ふのみとふ

北満を旅して心養へとの兄の誘ひに添はざりしを悔ゆ

北満より南の島に征きし兄空海よりの攻撃に果つ

兄が姉に島より託せる便りには吾を頼むと書かれるたりき

靖國に合祀される日よ弟と畏みて聴く敏としとの命

戦果で水爆実験場となりし島椰子の木繁るさんご礁いかに

残留の孤児一族と縁結び兄の遺志かと心寄せ合ふ

千鳥ヶ淵戦没者墓苑幾そ度訪ひては安らぐ兄と語る如

五十年祭を迎え憶昔する

福岡県 金子 庄之助

渺茫たる大洋に点在する、マーシャル諸島。その中で、この海域最大の飛行場と潜水艦の出撃基地であった、ルオット島の最初の主要攻撃は、一九四三年（昭和十八年）十二月四日、六隻の空母より二五〇機からなる攻撃を受けたと、戦史は伝えている。

それから二ヶ月後、昭和十九年一月三十日、戦雲は突如として、ルオット島とクエゼリン島の空を覆い、敵機動



部隊による、想像を絶する航空機と、艦艇群よりなる猛砲爆で、平坦で狭小、防備も不十分なルオット島は一瞬にして壊滅的打撃を受け、さながらこの世の地獄絵図と化し、かろうじて生き残った将兵も圧倒的兵器の差は如何とも仕

難く、恃む海、空からの救援もなく、絶望的戦況のもとで、遙かに祖国の安泰を祈り、又、懐かしい父母、兄弟、姉妹の名を呼んで今生の別れを告げ、或いは愛しい妻子の面影を偲びその息

災を念じ、最後の一兵まで祖国防衛の赤心に燃え、仮令、蟻螂の斧でも一矢報いんと応戦しては斃れ、最期の突撃を敢行しては斃れ、なかには魂魄この世に留まりてこの基地を守護せんと自決して斃る。

碧血は海を染め、大地を彩り、遂に二月三日、ルオット島の軍人、軍属、全員玉碎される。同じ頃、クエゼリン島も敵の大機動部隊を迎え壮絶な戦いを展開、二月六日、全員鬼神を哭かすむる壮烈な戦死を遂げられる。

両島守備隊の死闘、玉碎、及び周辺海域の島々で散華された将兵の心情を憶い、往事を回想する時、今も鬼哭吠々の声が聞え、只々、痛恨の極みである。

この悽愴極まる戦いより、歳月は心なく去つて五十星霜、父が、子が、夫が、兄が、弟が玉碎した異境の地に、一度は訪れて肉親の霊を慰めたいと念じながら、老いや、病などで望みが叶わず、悲嘆にくれながら他界された人々。或いは在りし日の面影を夢路に追い、覚めては還らぬ人の追憶に枕を濡らし、又、或る人は、神前や仏前に慟哭して万斛の涙を注ぎ、亡き人の冥福を祈られし方も居られよう。

このように、遺族の涙は永久に涸れることはないであろう。されど現地墓参を果された方々は、心の曇りも晴れ心機一転、明日への活力となったことと拝察される。老生も遺族会の恩恵に浴し、荆妻と三たび現地慰霊祭に参加、

三回目は念願のルオット島の墓参も叶い、慰霊祭を営むことが出来たことは、至欲、至幸の極みである。

更に、付記すべきことは、亡兄達の最期の消息が判明したことである。原稿枚数の制約で詳細に述べられないが、去る年の現地墓参の折、片山計氏が持ち帰られた、ロバート・オブライエン氏著、クエゼリン・ルオット戦の記録を、田賀将一氏が和訳され訳書をご恵贈頂いた文中に、ロイ島基地の十二機の日本軍機が、一九四三年(昭和十八年)の感謝祭の深更、ターナー將軍の機動部隊に華々しい夜間攻撃を敢行、空母レキシントンには中破されたこと。

又、三ツ木正次氏が翻訳された、環礁三十六号の別冊にも同様の記載があり、この十二機云々の機数が、戦後、亡兄の戦友が荆妻の実家を来訪された際の談話を、最近義妹から伝聞したところ、某所(マキンか?)を救援に、十二機の攻撃隊の隊長機で出撃されるのを見送った時、若し内地に生還出来たら宇佐海軍航空隊の近所の、家内の実家を訪ねてくれと頼まれていたからと申され、攻撃隊が帰投した時、生憎基地が空襲に遭い寸隙なき弾雨の中、着陸出来たのは二機か三機(妹の記憶が定かでない)であったという。

左様であれば兄の戦死は、昭和十八年十一月の最後の木曜日か、金曜日の何れかであろう。

このように、兄達の最期の戦いまで

判明したのも、前述のお三方、延いては、マーシャル方面遺族会、並びに、現地の方々の善意に由来するもので、感佩の念にたえず鳴謝申し上げる。

光陰矢の如く、爾来五十年を閲し、今茲に慰霊祭を営み英魂を祭祀する。

兄を偲んで

東京都 奥村 ムツミ

兄安井勇雄は昭和十八年の春入営までの一週間を、旧満州奉天市の我家に帰って来ておりました。兄はどうしたわけか京都の立命館大学を途中下車いたしましたして、黒龍江省にある自動車専門学校に在学して居りました。心の優しい闊達な兄でした。

兄の入営の前日、長兄英雄が大連より帰省し、一家七人が久々に揃って兄の入営祝いを中華料理屋で開きました。その夜はからずも川柳大会になり、勇雄兄は

黒龍

○赤飯の釜は元気に蓋をあけ(桃源)
○このときだ無鉄砲もの銃をとれ(桃源)

一家揃っての楽しい団欒もこれが最後になってしまいました。

満州で入営したはずの兄から来たハガキは、南十字星を眺めながら…とか椰子の葉影でみる月は、と云った便りでした。当時はどこに居るのか所在をあまりか出来ない時代でしたが、一生懸命南の島に来ている事を知らせようとしたのだと思います。

昭和十九年の春に戦友と云う方が兄より預かったと云って、兄の写真が届いた時はずでに玉砕して、この世にいなかったのですが、私共は兄が生きているものとばかり思っていました。

戦火がいよいよよはげしくなり、昭和二十年八月に終戦となったわけですが私達満州にいたものは皆、裸一貫で命からがら日本へ引揚げました。

我家は七人家族が皆バラバラになり、母は末の妹を栄養失調で亡くし一人で帰国、私と当時三歳の妹が一組、三男の兄と父はわれわれより一年程後に一人ずつ帰国、長兄と勇雄兄の消息はさっぱりわかりませんでした。一人先に帰国していた母が或る日、ラジオを聞いてみると、南方へ出征した兵士

の消息を聞きたい人は「千葉市小中台町にある留守業務局の広石課長に連絡をする

と良い」とアナウンスされたのを聞いてすぐ手紙を出しましたら、「お気の毒ですがご子息はマーシャル群島クエゼリン島で、昭和十九年二月六日玉砕されました。島には一人の生存者もない」と云う返事でした。行方不明の長兄がシベリアより帰り、勇雄兄を除いた家族が揃ったのは昭和二十三年の夏でした。

年老いた父は「勇雄が生きていたならなあ」と口ぐせの様に云っておりましたが、昭和三十八年十月に胃がんのため亡くなりました。母は九十二歳になりましたが、一年に一回靖國神社での、マーシャル方面遺族会に出席するのを生甲斐に、毎日兄の写真に手を合わせる日々を過ごしています。

今は平和な生活に馴れ、自分が幸せであることさえ忘れてしまいます。戦死された大勢の方々の犠牲で今の平和のある事を、子や孫に語り伝えて行きたいと、しみじみ思う昨今でございます。

マーシャル方面遺族会が何時までも続きます様祈っております。

追伸

私は安井勇雄の妹で、現在中野区大和町四一三五―十二に住んでいます。母の家まで五分位の所です。

兄 安井 勇雄命
母 安井 文子(会員)



○この体軀北の守りはご安心と云う句を作りました。(兄の号は

五十年を顧みて

会友 平林 和夫

マーシャル方面遺族会が、この度五十年祭を、厳粛かつ盛大に執り行われるという。誠に意義深く、しかも時宜を得たことであつて、私どもも会友の一人として、この上なく有難く思つてゐる。

今顧みる五昔昔前の、遠き戦いの忘れざる日、それは昭和十九年一月三十日未明のことであつた。ようやく反攻の機を得た連合軍は、勢いに乗つて、ついに中央突破作戦を、わがマーシャル方面に向け、一大機動部隊をもつて、大挙来襲したのである。

そのとき私はマロエラップ環礁の、小さな島にいた。零戦で名高い戦闘機の、第二五二海軍航空隊であつた。二五二空は、ラバウル、ルトット、マロエラップと、本隊を移しながら、派遣隊をマーシャル各島に展開し、転戦を重ねていたのである。

圧倒的な物量差、兵力差によつて、忽ちの裡に、クエゼリン・ルトット・ブラウンが相次いで玉砕、敵手に落ち、私どもがいたマロエラップを始め、ウオッセ・ヤルト・ミレその他の島々は、航空戦力壊滅のあと、徒手空拳、廃墟と化した孤島基地に、尚敵の一方的攻撃に抗する籠城持久を余儀なくされたのである。

以後終戦による帰国まで九二年、同方面の島々は、何れも苦悩の糧食戦を強いられることになった。既に戦局の大勢は、マーシャルを通り越して、遙か本土を指向していた。最早味方軍の進撃はおろか、敵側さえも、われらを「自活せる捕虜」と呼ぶまでになつてしまつてゐた。

終戦によつて、辛うじて帰国出来た私どもは、マーシャル壊滅から早くも五十年、感慨一しおなるものがある。世は平成と改まり、マーシャルは独立して共和国となつた。私どもは次第に数を減らしている。

ともあれ今日まで生かされて、及ばずながら国の新生再建に小さな小さな務めを果し、尚町づくりへのボランティア参加が、少しでも続けられているのはこれ偏に、戦場に果てた戦友の思いやり深きご加護の賜に他ならない。私どもはこのことを思うとき、いつも「あだやおろそかに生きてはならない」と絶えず心に刻みつけてきた。

さて、マーシャル方面遺族会が、機関誌「環礁」をこの度六十号まで続けられたことは、代々の会長様他役員の方々の献身的なご奉仕によるものであり、これは大変大きなお仕事であつた。私どもは環礁が来ると、すぐ開封して、息もつかず立つたまま、で読みふけるのを例とした。これまでに私の小さな報告文も何回か載せて頂いて光栄に思つてゐる。

私どもはこのマーシャル方面遺族会が、これからも永く継承継続され環礁誌が健やかに成長発展することを願わずにおられない。

最後に私は、この五十年祭を機会として、次の三つのことを秘かに心してゐるのを明かしたい。

一、環礁前号に載せられていた靖國神社奉賛会の正会員に加入して、祭神の永安と世界の平和を祈ること。バッヂをつけ標札を掲げて、奉賛の波を広げたい。

二、この度の五十年祭又は、今後開かれるマロエラップ座談会の何れかに参加すること。遺族の方々にお目にかかせて頂きたい。

三、終戦五十年が巡つてくる平成七年夏に私の「戦記ノート、環礁」を完成刊行すること。この内「第一部、怒濤」は、別の本に収載済であるが、第三部までを入れて完成し、ゆかりの人々に送りたい。この三つである。

マーシャル諸島共和国に平和と幸あれ。
（平成五年十二月二十四日）

五十年の思い出

東京都 佐竹 エス

昭和十八年十一月十九日、小樽駅前旅館での朝食の時、「おめでと〜」「な

んで？」怪訝な面持ちで問い返す彼に私は「お誕生日でしょう、お祝いしましょうね、今日は船も出ないでしょうから」とそうある事を願ひ乍ら云いました。しかし正午まで連絡がなければ出航したという事だから帰るようになつた。その言葉を最後に私達は別れ別れになりました。

それから一ヶ月余り、南洋方面を廻つて来たようでした。その時彼から頂いた記念の腕時計を、私は感情の赴くまま、棧橋から海に投げつけてしまったのです。今にして想えばみんな私を思えばこそその事であつたのですが、「結婚するのではなかった」とか、「三ヶ月連絡がなかったら死んだと思え、女は若い内が花だから身の振り方を考えろ」というのです。私も悔し紛れに「男を頼りにしなければ生活出来ない人間と思つてゐるのですか」と云い争いになったのです。私にも生活力があり空想の社会で生きられる人間だから安心して我が道を行くように、「束縛せず希望ある毎日であるよう心掛けましょう」と話し合いました。

「軍人として捕虜になるのは嫌だ最悪の場合確実に死ぬる方法は？」……の間にとまどいましたが、職業上知る限りの事を知らせました。そして「これからは航空機、無線電信が研究され世界が狭くなりお前の好きな空想旅行、二人で行かれる日を楽しみに次の再会は何時何処か？」等と語り合い乍ら笑

顔で送る事が出来ました。

十二月一日付木更津からの便りに幌
蕨に着いたとありました。

小樽での思い出が浮んで来る。緊迫
した戦況下ゆえ余裕もなく手紙もやっ
との様子、吹雪の明け暮れか、灼熱下
の戦か、勝利の年への最後の頑張り、
しかし小包等送らぬよう宛先変更あり
の注意等何時しか連絡も途絶えました。

そんな中クエゼリン、ルオットの玉碎
発表に、若しかして参加しているの
はないかと漠然と思っておりました。

昭和十九年六月二十八日私の誕生日
なのですが義兄の急な帰宅に不審な思
いでおりますと、井上正五郎戦死の公
報が届いたとの事、母からは「軍人の
妻としてうらたえず覚悟して挨拶する
事が出来るように」と力づけられまし
た。

戦死公報には舞鶴海兵団より「十九
年二月六日時間不詳、南洋群島に於て
戦死」とありました。

奇しくも井上正五郎の誕生日に別れ
私の誕生日に公報を受けた訳です。

知人友人の慰めの言葉は私にとつて
は堪え難く、疎開学童達の教員となり
次代を担う子供達と元気一杯頑張りま
した。

昭和二十年八月十五日疎開学童一周
年記念日としてお楽しみ会の予定をし
ておりましたところへ突然、玉音放送
があったのです。

苦しい戦争の最中ほんの少しの楽し

みを求めて居たのに一瞬にして暗闇、
これからどうなるかと思いました。

疎開学園も解校となり私は上京して
品川区の小学校勤務になりました。

戦後の教員生活、私には平々凡々の
ようでした。

昭和四十二年浮田さんと二人でマー
シャル方面の現地慰霊を六ヶ月に亘つ
て行かせて頂き、今日五十年祭を迎え
ました。度々激戦地をめぐる慰霊を重
ねておりますが、一人旅でも常に彼が
ガードしてくれているようで同行二人
の気分です。これからは健康と経済の
許す限り旅を続けるつもりです。

クエゼリン基地の第三玉丸

会友 安室 慶二

私は、昭和十六年九月二十日に巡洋
艦摩耶から大湊港で機装中の第三玉丸
に転勤しました。乗組員は五十名位で
捕鯨船の船員が軍属として十五名位と
現役兵十数名位、他は応召兵でした。

武装は、捕鯨砲の跡に明治の大砲で
短八種砲と、船橋のトップに七耗七機
銃三八式小銃が十数丁でした。後部
には爆雷投射機を取り付け、潜水艦攻撃
用に爆雷を二十数個搭載して居り、速
力は十二ノットでした。

吃水が高いので船底に砂利を多量に
積み重心を低くし安定をはかりました。

第三玉丸は大洋漁業の前身の林兼水
産のキャッチャーボートとして三菱重

工業長崎造船所で昭和十一年夏に竣工、
二五七トン、七五〇馬力、当時一隻二
五万円であったそうです。

十一年十月から南氷洋捕鯨に従事し、
開戦に際して海軍に徴用されたのです。
機装を終え横須賀に廻航し備品、消耗
品、食料等を積み込み十一月三日出港、
父島、サイパン、ポナペに寄港してクエ
ゼリンに到着したのは十一月二十一日
でした。

直ちに第六根拠地隊第十六掃海隊に
編入され僚艇の第五玉丸、第七昭和丸、
第八昭和丸と共にマーシャル海域の哨
戒に当たりました。

十七年二月一日午前四時すぎ、マー
シャル群島の主要陣地であるクエゼリ
ン、ルオット、マロエラップ、ウオッ
ゼ、ヤルト、ミレの各島に米機動部
隊が襲いかかり、艦艇、船舶、航空機
の被害も多く、更に直属上官の六根司
令官八代少将と、先任参謀法元中佐の
戦死は痛恨の限りでありました。

その後礁湖入口から三千米位の沖で、
商船が魚雷攻撃をうけ沈没したので乗
員を救助しました。

十七年六月頃ウエーキ島にゆきまし
た。日本の駆潜艇と思われるのが二隻、
赤錆になって乗りあげていました。

島は二、三米の高さで椰子は一本も
なく、草が少し生えている位で、トラッ
クで島を一周すると四十五分位でした。
木で作った大砲や薬人形が配置してあ
りました。米軍の捕虜を三、四十名使

役していました。

クエゼリンに芸能慰問団の花柳小菊
一座が見えました。船をやられて着る
物が少なく、海軍の防務服を着ていま
した。ルオット島までは船で五時間位
でした。度々交代で入浴にゆきました。
ヤルトへ休養に行つたこともあり、
マキンにもゆきました。

私は航海学校高等科入校の為、十八
年四月一日下船六十一警備隊に飯入隊
として、食料運搬船海光丸(五百トン)
で十日位かかって五月九日帰国しまし
た。

以下に述べることはあとで聞いた話
です。
十八年十一月十九日から二十日にか
けて米機動部隊はタラワ、マキンを襲
い、二十一日には両島に上陸、二十五
日にはわが守備隊は寡衆敵せず柴崎司
令官以下約五千名玉碎の悲報に接した。
去る五月二十九日のアツツ島守備隊
玉碎につぐ悲しい報せであった。

十九年一月三十日より米機動部隊と
タラワ、マキンの基地からマーシャル
群島の各島に対する空襲は熾烈を極め、
特にクエゼリン、ルオットには二月一
日の猛烈な艦砲射撃もあって、砲台、
爆薬、燃料、弾丸等は殆ど破壊された。

私の乗っていた第三玉丸は一月三十
日の空襲で沈没、戦友は全員戦死した。

二月二日、クエゼリン、ルオットに
敵が上陸、必死の防戦も空しく秋山司
令官以下約六千五百名は玉碎された。

二月中旬、ブラウン環礁に対する米機動部隊の攻撃は劇しくなり二月十九日大陸開始、激戦の末二月二十四日、西田旅団長以下約三千七百名全員玉砕したが、大本営は国内の士気低下を恐れてか発表をしなかった。戦後は米、原水爆の実験場とされ、ビキニの二十三日を上廻る四十三回の核実験が強行された。死所を得なかった者として何ともやりきれない思いである。

玉砕を免れたウオッセ、マロエラツプ、ヤルト、ミレ、クサイエ、ナウルの島々でも間断ない空爆と、一切の補給がと絶え、飢餓との戦いに散華された戦友も多かったと聞きます。マーシャル、ギルバートの三万余柱の御霊安かれとお祈り致します。

五十年を顧みて

岩手県 高橋 吉正

父が応召になったのは、小雪ちらつく昭和十五年十二月十日、五十五歳の時であった。来年四月で兵役の一切が終了すると云っていた矢先であった。本人は勿論家族も皆びっくりした。しかし「年だから横須賀で留守番役だろう」ぐらいに軽く考えて出立したのは師走も半ば頃であった。

世間では名譽の応召であると云って旧一の関藩主の田村海軍少将閣下を始め山目村の阿部村長等大勢の人々に送られての華々しい首途であった。とこ

ろが勤務地は上海陸戦隊となり、かつて上海事変の時の懐かしの地へ勇躍赴任したのであった。

そして翌十六年十二月八日、大東亜戦争が勃発した。父はその翌年「〇〇方面に赴く」との連絡を残して何処かに行ってしまった。南方方面に赴いた事はうすうす解っていた。昭和十九年、蟬が喧しく鳴いている頃「昭和十九年三月十九日、南洋方面で名譽の戦死」との公報を受けた時は思いがけない悲報に吃驚させられた。行年五十九歳であった。

今次大戦の戦死者の最高年齢であつたらしく、戦死の場所は玉砕地クエゼリンの近くのミレー島であつた事を知つて、軍人として死所を得たものだったと家族は慰め合つたが、今にして思えば残念無念の一語に盡き口惜しき事である。

憶えば、あの時から茲に五十年。母は三十年前に病歿したが、生前はいつも年忌毎に近親者、近所の方々をお招きして追悼法要を営んで父を偲んだ。私は上京の度に靖國神社に詣で御霊を慰めたり、マーシャル方面遺族会にも三回程参列して、皆さんと一緒に慰霊祭、総会に参加させて貰った。

又昨年五月三日には一族十七名と靖國神社の本殿に昇殿して神官から祝詞を奏上していただき五十年祭を一年繰上げて行つた。

長男である私も、すでに八十歳を迎

えた。

最近父の経歴、戦歴を中心とした伝記を作り、護国の鬼と化した父の遺徳を永久に子々孫々に伝えたいと努力中である。

尚、私の末弟は陸軍の青年将校であつたが、敗戦の悲憤やるかた無く、任地スマトラにて自決して父を追いつくに殉じてしまった。

出征が永久の別れに

新潟県 山田 正三

出征のために生家を出たのが、直ちに家族や故郷の人々と、永久の別れとなった。こんなことは、出征兵士や遺族なら、ごくありふれたことで、珍しいことでもない。但し残された遺族にとつては、尽きない痛恨事である。

義兄静雄(妻の兄であるが、私は一度も対面したことはない。)が村民歎呼の聲に送られて生家を出たのが、吹雪の昭和十六年一月であった。軍用列車輸送船は一路、満州独立守備歩兵第十六大隊駐屯地洮南に赴いた。

当時義兄の父母は既に死亡し、母と妹二人だけの所謂女世帯であった。人一倍家族思いの義兄は、留守家族のこととがどんなに気になったことか。

十九年二月、クエゼリン島で玉砕した義兄を、特に傷ましく思うのは、出征で家を出たのが直ちに家族との永久の別れであり、その間ただ一回の帰宅

も許されなかったことである。

これを私の場合と比較して見よう。私は十七年四月、生家から約20km離れた軍都新発田町にある兵営に入り、二ヶ年間に内地勤務であつた。

この間私は、五、六回の外泊を許され、家族と歓談会食をした。また日曜祭日には、家族や知己が、よく兵営まで面会に来てくれ話し合つた。外部からの面会人が、営内に食べ物を持ち込むのは禁止されていたが、酷しい軍隊でも裏と表はあつた。

多くの出征兵士もそうであつたが、義兄には、入隊後ただ一回の家庭への外泊、家族との対面もなかった。兵士は家族に、軍規に觸れぬ程度で、できるだけ兵営生活を語りたかつた。一方留守家庭や故郷のニュースも知りたく思つた。

兵営からの通信は、特別の場合を除き、はがきで然も厳重な検閲が必要であつた。勿論電話などは論外である。出征し戦場に向う身であれば、もとより生命の保証のある筈もない。せめて生きている今日、家族との対面、語り合いを望まぬ兵士の一人もないことは当然である。

平成五年八月二十二日、長野県松代の大本営の洞窟を見学した。この工事に従事した延人員三百万人、当時の金額で二億円と云われ、劣悪なる工事環境下で死亡した人も多い。

戦争とは空しく悲惨なものである。

然も戦争は自然現象ではなく、人為的なものである。理屈は要らない。とに角戦争は防がねばならない。

五十年を顧みて

神奈川県 石澤 洋子

桜前線も北上し、若葉の季節となりました。

平成五年十一月厚生省のマーシャル諸島慰霊巡拝に参加して、マーシャル方面遺族会を初めて知りました。早速入会させていただき、三月二十七日の五十年祭に靖國神社参拝にも参加させていただきました。ありがたいとございました。

父篠崎松雄は私の生まれる前に出征しました。女の子が生まれたら洋子と名付ける様にと云っていたそうです。そして私とは親子の対面をすることなく昭和十九年二月六日クエゼリン島にて戦死しました。

父は特設捕獲網艇宇治丸に乗っていました。写真は昭和十六年に函館の実行寺での慰霊祭のときのものです。前列の右から二人目が父です。

三年程前に、勲章といっしょに小さくおられたまれたごく簡単な手紙ができました。

想うに、十一月末にはタラワ、マキンが玉砕し、きびしい戦局となつて、短い文ながら万感の思いがこめられ、五十年の歳月を越えた今も昨日の手紙の様に私の胸に響きます。



長年の願望でありました父の戦死した島に慰霊をすませ、二月六日には、クエゼリンから持ち帰った珊瑚礁の一片を、お墓に納めて五十回忌を行ない、遺族として心の区切りができました。

遥かに遠い赤道直下のマーシャル、椰子の木茂る南海の孤島、小さな珊瑚礁の島々、美しい環礁を自分の足で踏みわが目で確認し、ここが父の眠る島

かと感激しました。

マジロ島のあの細長い一本道、椰子の並木、両側に広がる蒼い空と海、のんびり暮らす現地の住人、はじめて飲んだ椰子の甘い水、夢の国のようでした。

今思うとすべてが懐かしい思い出です。現地の方が親切に戦没者を弔って下さっているのは本当にありがたい事だと思えます。機会があれば再訪したいものです。

この旅が自分にとって、もうひとつの出发点になればと思っています。

思 い 出

千葉県 岩佐 とみ

光陰矢の如し、年月の経つのは早いものです。終戦後五十年、顧みれば十八年八月、夫岩佐清司は、横須賀海兵団に入団しました。当時、私は二十五歳で長男は三歳、次男は三ヶ月でまだお腹の中におりました。夫は館山砲術学校に移り、二度面会に行きました。

当時は切符の入手も困難で、お遺物を持って行きやつと手に入れる有様でした。十二月戦地からの便りがあり、それは横須賀局気付ウ九〇ウ五〇発信で「この地は暑いが、元気で軍務に精励しているから安心せよ。健康に注意し、子供の教育と仕事に励め。詳しい事は後便で」とあり、今思えばこれが最初で最後の便りでした。

五月二十九日アッツ島玉砕、続いて十一月マキン、タラワ玉砕、翌十九年二月クエゼリン島の玉砕と続き、この間四月十日に次男が誕生しました。戦いは益々苛烈となり物資は不足、一億国民欲しがりません勝つまではの合言葉で頑張つて参りました。

男は皆兵役に、残るは老人、女、子供だけになりました。昭和二十年二月十七日には敵艦戦機が飛来し、街は火の海となりましたがその頃には、神風特攻隊の若人が愛機もろ共敵陣地に突入、散華されるという無念としか言い様のない事実もありました。六月には沖繩も占領され、八月には広島、長崎に原爆が投下されて遂に終戦。お心を悩まされた天皇陛下の「耐えがたきを耐え忍びがたきを忍んで」という玉音放送は生涯忘れられることは出来ません。勝つことを信じて頑張つてきました

が八月三十日には連合軍、マッカーサーが進駐し、それから引揚げが始まりました。私も一日千秋の思いで夫の復員を待ちました。二十年十一月GHQが「恩給および遺言」と題する覚書きを出し、日本政府に特別処遇は終わりとするよう指令、又、神道指令を出し神社と国の関係は断たれました。今まで送られて来た主人の会社の給料も停止され、遺族にとって正に冬到来でした。思えば日が暮れた遠い道を、英霊の心をただ一つの灯として、苦難の道を歩まねばならなかったのです。

翌二十一年インフレ抑制のため、金融緊急措置令が出され、二月新円切替、月額世帯主三百円、家族一人百円を限度として交換され、後の金は封鎖されました。翌年の四月に次男が百日咳、麻疹とそれに肺炎を併発し四十度の熱を出し今のように良薬は無く、医者にも見放されました。主人の出征後に生まれた子なので、一目元氣な顔を見せるまでとは溺れる者は藁をも掴むのとえ通り神仏に祈り、徹夜で看病しましたがその願いが通じたのか無事快復しました。その喜びも東の間一ヶ月過ぎた頃主人の戦死の公報が届きました。「十九年二月六日岩佐清司マーシャル諸島クエゼリン島で壮烈な戦死を遂ぐ」かねて覚悟はしていたものの一時は呆然として何が何だか分かりませんでした。

出来ず、千葉県知事さんに保証人になって頂きました。三十六年日本遺族会青年部結成、また国民年金法という有難い社会福祉制度も出来、母子福祉年金も支給されるようになりましたが、私の子供は既に十八歳を過ぎていたので該当しませんでした。二十八年にはやつと戦没者の妻に対する特別給付金十年償還の国債が支給されるようになりましたが、この喜びを見ずしてこの世を先立たれた方々を思うと胸が痛みます。三十九年二回目の全国戦没者追悼式が靖國神社境内で行われ、私も県の代表として参列させて頂きました。

兄と私
熊本県 植川 二男

五十年祭の昇殿参拜のとき、兄弟の代表として、玉串奉奠をさせて頂きましたのは一生の思い出となります。

兄一男は、大正十一年に熊本県玉名市に植川家の長男として生まれ小学校八年間学級長を努め卒業の際には特別優良彰を受賞致しました。卒業後は、現在の九州電力株式会社に就職し真面目な青年でした。

艦に乘組み努めに励んでおりました。明けて十八年一月、兄は徴兵として佐世保海兵団に入団し、その知らせは受けておりましたが、当時艦は台湾の高雄を基地として南方方面への船団護衛の任務で、近くに居たら面会に行きたいと思っておりましたところ、三月末に佐世保に帰港することになりました。予定通り母港に帰港致しましたので駆け足で海兵団に行き、衛兵に面会を求めましたところ、すでに新兵教育は終り現地部隊に出発したとの事で、行き先さえ分からず思い出しては今までよくやし涙が流れます。

私は五月二十三日護衛艦を退艦して水雷学校に普通科練習生として入校、続いて大竹の潜水学校に進み十九年一月三十一日潜水学校を卒業、スラバヤの第二十一潜水艦基地隊付を拝命し、二月六日に岩国港を出港する航空母艦に便乗しました。後日分ったのですが私が潜水学校で卒業前の勉強に励んでいた頃、クエゼリン環礁では生き地獄さながらの肉弾戦を繰り返し人員と物量に勝る米軍の猛烈な空爆また、海からは数十隻の艦隊の猛砲撃を受けて力尽き全員が玉砕されたものと思われま

歳月は流れ二十六年にはマッカーサー元帥は解任されて本国に帰り、政府も国会で遺族処遇早期解決にのりだし、遺族援護法が制定され、今まで七年間暗い谷間で寄添ってお互いに助け合ってきた私達遺族に一筋の光明が射して来ました。旧軍人に恩給復活、遺族にも公務扶助料が支給されるようになりました。

昭和二十八年一柱一万円、扶養家族年額五千円が支払われました。各地で遺族会が結成されました。三十二年には長男が学窓を巣立ち就職しました。両親が健在でなければ良い所へは就職

五十七年に私も主人の眠るクエゼリン島へ墓参に行きました。お父さん長い間お待たせしました。子供達の待つ我家へ帰りましょう。息子二人も今は二兎の父親として元気で頑張っています……。

昨年二月六日、五十回忌を済ませ、妻と母の責任を果たし、残り少ない人生を自分のために楽しく過ごして行きたいとおもっています。

(平成六年三月一日)



着替え私物を兄に託し別れたのが一生の別れになるうとは夢にも思いませんでした。

私は新兵教育終了後、輸送船の護衛

その玉砕された日、私は南方に向け岩国港を出港したのです。途中何事も無くシンガポールで小船に乗り換えジャカルタに到着、陸路スラバヤの第二十一潜水艦に入隊しました。

二十年五月、独逸軍が連合国軍に破れ、降伏した折りジャカルタにいた独逸軍の潜水艦を我が海軍が接收し伊号五〇五潜水艦としました。

私はその乗組を命ぜられ乗艦しました。五〇五潜水艦は接收の点検の為、エンジンのほか各機械を分解修理中で我々も作業に追われ大奮闘中のところ、間もなく八月十五日となり、敗戦を迎えました。一時は茫然となって頭の中が真っ白になり、何が何だか分らない状態が続きました。乗員は二十歳そこそこの若者が大半を占めて居りました関係で血気盛んな者共が多く、潜水艦で出撃しるとか第二の日本を作るとか、色々な話が持ち上がり騒然となりましたが、頭の血も冷めた頃先輩の熱心な説得により若者の気も治り平静に戻りました。

その後バンドン市の奥の山中のチャール地区に集結、自給自足の為農耕を初め薩摩芋の植え付けや牛や山羊の飼育に追われておりました。

その内隊員も五人六人と作業隊に引き出され人数も減り、二十一年三月末チャールを引き揚げ、ジャカルタに到着、五〇五潜水艦の半数位が貨物船に乗り外人の輸送に従事しました。

二十二年二月二日オランダ船で宇品港に帰着、三年振りの母国に小雪のちらつくのを防暑服の半袖半ズボン姿でブルブル震えながら眺め、本当に日本へ帰れたと目頭が熱くなるのを感じま

した。

検閲や被服の支給を受け四日の午後戦友と別れ別れになり、故郷に向かい、五日の朝五時頃自宅に帰りました。

思えば潜水学校を出て南方に向け出港したのが兄達が玉砕した日、復員して帰宅したのが命日の前日、何か見えぬ糸で結ばれている様で縁と云うもの不思議なものだ、とつくづく思いました。

私が当遺族会にお世話になってから六年になります。役員の皆様方のお陰で兄の事が少しづつ分ってきましたが、兄の同年兵の方々はまだ一人も分りません、ご存じの方がおられましたらご連絡ください。

遺族会役員、会員、会友の皆様今後共宜しく願ひ致します。

二十年祭と浮田様の思い出

会友 高田 源次郎

昭和三十八年に雄飛会会報でクエゼリン遺族会の二十年祭のことを知り、浮田様に私の事情を説明して、お役に立つなら出席致します、と連絡致しましたら「是非来てください」との事でしたが日が近くなるに従い遺族の心境を思い気が重くなりました。ご叱責を受けるなら一人より二人の方が少しでも気が楽だろうと同期の柴

田(乙飛予科練一五期)に同行を求めて重い足を九段へと運びましたら思いも懸けず同期生、相原、木村、根生の三名に迎えられ大変心強かった。

受付で浮田様に初対面の挨拶をして来賓室に通されたが、元下士官の田舎者には場違いで小さくなっていった。昼食も無い、会費他全部送ったはずなのに、腹が減ってはと、忙しくしておられる浮田様を探し一文句、「之は失礼こちらに」と案内されたのが食堂で高級ランチ、今度はこちらが恐縮、腹ごしらえも出来覚悟を決めて会場へ。数々の立派なアトラクションから「戦場を語る会」となり、宮田輝氏の司会で私

が一番に出る予定が、柴田を紹介させられて気の小さい彼は慌てていた。私も高い所から之ほど多くの人の前で話したことがなく上がって、受け持ちの十五分がアツという間でした。後の士官の話が続き宮田さんを困らせた方も有りましたが終了前に「未だ聴きたい人は個々にどうぞ」で柴田と私にご遺族が殺到されたのは驚きました。其の中に特に気に懸けていた先輩川本さんのご両親が居られたのは二度ビックリ、出発前に同期の武智さんより細々と書いた手紙を貰っていたので之を渡して玉砕を確認して貰いました。

翌日の皇居拝観中まで思い出すまま咽喉の続くまで語りました。生き残ったことを誰一人もご叱責も無く有り難い有意義な二日間でした。帰りに京都

に立ち寄り川本さんの御霊におまいりし、足取り軽く帰岡しました。

京都大会では、同期の目(さつか)からの九五二空堀家司令のことを細かく書いた手紙を持参して出席し、司令の奥様にお会いして語り明かし以後ご親交を戴きましたが何れも先年惜しくも他界されました。

五十一年に浮田様のご協力を得て初めて九五二空慰霊祭を岡山にて開催しましたが、十五名の予定がご遺族、生存者総勢四十数名の盛会になり直ちに九五二空会を結成して各地で慰霊祭を実施しております。今年も十一月に智恩院で五十年忌を予定しています。ご遺族と生存者が仲良く長く続ける会は珍しいとも言われて居ます。

五十四年三月に政府の遺骨調査団に加えられ、浮田様と同行しましたが、このとき浮田様にこの旅の間従兵として使って下さいとお願ひし、途中一回だけシャツなどを洗濯しました。

浮田さんは「体温は三十六度。着て居れば直ぐ乾く」と直ぐ着てしまわれ(飛行兵の私は従兵の経験無し)、トラック島出港後船酔いに苦しむ私を見て「此のくらしいの波はサザナミだ」のお言葉は懐かしい思い出です。プラウンに到着しましたが米軍の許可が出ず宿願のメリレンを目前にしながら悔しい思いをしながら持参の菊花を海に投げ慰霊をして心を残しながら帰りました。(平成五年八月二日)

五十年祭現地慰霊

Ⅱ マーシャル諸島 Ⅱ

五十年祭の節目の年に際し、現地で厳肅な慰霊をとの熱意の人々が、八月一日午後九段会館に集合した。最高八十一歳の女性をはじめ、七十歳以上の二十五名を含む参加者は、妻七名、子二十名、兄弟十五名、姉妹十三名、孫四名甥姪外四名、会友六名、ボランティア同行医師一名の合計七十名の過去最多数となった。

行動概要 (時刻は現地時間)

8月1日(月)靖國神社に昇殿参拝して現地お供え用の御神酒、お水を頂く。次に千鳥ヶ淵戦没者墓苑に拝礼し、九段会館で結団式、打合せを行い、見送りの役員等六名と会食、懇談。同夜は会館泊り。

8月2日(火)バス二台で成田へ。

コンチネンタル航空九六二便で10・30発、グアムに15・45着、平和慰霊公苑の平和寺に詣でてリーフホテルに一泊。

8月3日(水)08・30グアム発、マジユ口着は19・00 清めのスコールの洗礼をうけて三つのホテルに分宿。

8月4日(木)早朝、マジユロ平和公園の東太平洋戦没者の碑に花を献じ、海上自衛隊東京音楽隊提供の鎮魂の

曲(テープ)を捧げて、マーシャル諸島、ギルバート諸島及び周辺海域で戦没された三万余柱の御霊に礼拝した。

ブラウン班十五名は08・30マジユロ発クエゼリンで給油しブラウン島で慰霊して同日マジユロ泊り。

マロエラップ班(六名)は終日マジユロ島内見学

クエゼリン班四十名とルオット班九名は11・00マジユロ発12・00クエゼリン空港に着く。接待役のレイオン夫人とアキ・ホール夫人が出迎えて下さった。空港の休憩室が工事のためホール夫人が御自宅を休憩のため開放し、ケーキや日本茶を振舞われた。この日の中食は連絡不備の故か、ついに現われなかった。

双発機でルオットに向い、出迎えのクローリング御夫妻に、ここでもケークや冷たい飲物のほか美味い沢庵漬まで御接待頂いた。墓苑は何時ものようにきれいに整備されていた。丁重におまいりし、古戦場を一巡してクエゼリンに帰り、十二人は島内のロッジに、その他はフェリーでエバ

イのアンロハサホテルに向う。
8月5日(金)クエゼリン、ルオット

班はクエゼリン墓苑に「みたままつり」の大型提燈を掲げ、鎮魂の曲の流れる中に、本会関係三万余柱の英霊に御霊安かれとお祈りした。

18・00コンチネンタル航空九五六便に搭乗、帰路につく。
マロエラップ班は、08・00マジユロ発、マロエラップ環礁のタロア島に向う。今回は飛行機の手配が難しく、ウオツゼ関係者の参加がなかったの

で、マロエラップ班がウオツゼ戦没者の霊にもおまいりした。

19・20マロエラップ班、ブラウン班ともコンチネンタル航空九五六便に乗り帰路につく。
日付変更線を通して早朝ホノルル着。終日静養。

中田イサム氏御夫妻が同宿され食事、市内観光をともした。

8月6日(土)太平洋国立記念墓地におまいりし、戦陣に散華されたすべての人々の霊に謹んで礼拝した。

8月8日(月)予定より早く16・30分に目的を果して、全員無事に帰国した。

同行医師小島先生には、本会の依頼によって経費全額を負担されて参加下さいましたのは、まことにありがたいことでありました。

参加者名簿

団 長 佐藤 宗丕
同行医師 小島 温

第一班	クエゼリンA班	班長	石川正興
石谷	典夫	薄木	智雄
片山	正臣	川本	彦次
川本	義郎	久保	末喜
小林	澄雄	佐藤	宗丕
佐藤	隆一	佐藤	章子
鈴木	裕子	武智	秀一
田中	龍治	豊谷	秀光
仲座	真盛	新田	忠雄
第一班	クエゼリンB班	班長	片山
服部	くにゑ	服部	景
馬場	剛人	馬場	直人
松友	公子	松永	タツ子
丸田	巖	山田	キヨエ
山田	裕史	山森	久江
第一班	ルオット	班長	黒川
菊地	彦亘	栗山	美子
田賀	朋子	田賀	将一
松木	孝子	山中	美子
第二班	ブラウン	班長	遠藤
荒木	常子	石塚	文子
大見	シノブ	片岡	良子
田島	智恵子	田中	猛
富田	キミ	中村	秀夫
嶺井	倭文子	吉田	正次
第三班	マロエラップ	班長	鳥丸栄二
青山	次則	佐藤	敬義
山内	キク	山内	正隆

添乗員(日本通運株式会社)

第一班 松島 貢
第二班 石鳥 真弘
第三班 藤本 健二

五十年祭現地慰霊に参加して

参加された皆様から感想文、写真、札状などを沢山頂きありがとうございました。次にその一部を披露いたします。紙面の都合で割愛させて頂いたものもあります。が御了承下さい。

(事務局)

マーシャル諸島

慰霊に参加して

香川県 石川 正興

今回マーシャル諸島のクエゼリン島、ルオット島、ブラウン島、マロエラツプ島の戦没者慰霊の為七十人の大規模の慰霊団が、八月二日に成田を出発八日に帰国し、五十年祭の大きな節目となる現地慰霊が出来ました。

私の場合父が昭和十九年にクエゼリン島で玉碎しましたが、当時父は五十二歳、私は十五歳でした。今年私は六十五歳となり戦死した父の年齢を遥かにオーバーしました。この間気になりながら未だ一度も現地慰霊に参加しておらず、この機会を逸すると永久に行けないのではないかと云う危惧の念から今回参加いたしました。

父の戦死した土地をこの足で踏みしめ又現地の砂を握りしめ、やっと多年の念願がかなった充実感と父との再会を果たした感激にひたりました。

クエゼリンの墓苑は、一面の芝生に

白い柵を巡らし、赤い大きな鳥居に「日本人墓地」と記されており、当遺族会が造って送った慰霊碑が建てられ、日本で見かける軍人墓地などより遙かに綺麗に手入れされていました。

遺族の各々が、持参した供物を供え、団長持参の海上自衛隊音楽隊による「国の鎮め」「海ゆかば」等数曲のテープが荘重に流され、一同黙祷を捧げた。また、団員で僧籍にある豊谷秀光氏の般若心経の読経により全員心からの冥福を祈りました。

今回訪問したマーシャル諸島は日本防衛上非常に重要な拠点でしたが、島は大変小さく珊瑚礁の上に来た海抜数米の平地で、椰子の木だけが生い茂り防禦するには最も不適な地形であり、今更ながら、あの当時熾烈な艦砲射撃と空爆に耐えて、一週間とは云えよく持ちこたえたものだ、現地に来て改めて頭の下がる思いがしました。

今は絵の様な島、エメラルド色の海、輝く太陽、きめこまかな白砂、椰子の木、正にこの世の楽園と云う印象ですが、五十年前の状況を思うと天国と、地獄の両絵図になります。

慰霊団に参加して特に感じたのは、クエゼリン、ルオット両島に想像していたより遙かに立派な墓苑に慰霊碑が造られ、よく手入れがされていた事です。

墓苑は米軍の手により占領直後、自衛的に造られたのですが、敵味方を

問わず祖国防衛の為に戦死した勇士に對する、米国人の行為に對し感謝の念を禁じ得ません。

クエゼリン島の忠魂慰霊碑は、内部に格納されている戦没者三万余人の霊璽簿、霊璽票、碑の正面に埋め込まれている日本全島の銘石で形造られた日本地図等、他に類を見ない心のこもった慰霊碑です。御霊が遙かマーシャルの地から日本を望み、祖国と我々の行く末を常に見守ってくれており有難く思います。

クエゼリンでは、アキ・ホールさんに、ルオットでは、クーロングご夫妻に手造りのケーキや冷たい飲みものなど、心温まるご接待をいただき一同感激しました。これらの島に居住している方々が、時折りお墓の清掃やお供えものをして下さっておられるとのこと、ありがたいことです。

帰路ホノルルの市内観光のバスガイド柴田さんの説明は一流でした。その上日本の風潮を嘆き、祖国の人々に日本心をとり戻すよう訴える言葉に、心を打たれました。

(註 筆者の厳父は、第六根拠地隊司令官海軍中将秋山門道命)

慰霊巡拝団に参加して

小島 温

遺族会の佐藤会長の要請と、海軍軍医学校同期の渡辺哲夫君からの依頼に

より、この度の慰霊団のボランティア・ドクターとして同行した。

大戦中は、海南島やフィリッピンで戦塵にまみれたが、南洋群島は初めてなので、どんな病気や事故が起こるのか解らず、いろいろ思いを廻らして、一応、聴診器、検温器、血圧計、救急薬品として感冒剤、胃腸剤、下痢止め抗生物質、ビタミン剤等を用意し、リュックサックにつめた。荷を少なくするため、背広も省略した。

同室には六根秋山司令官のご息子の石川正興さんに決まった。

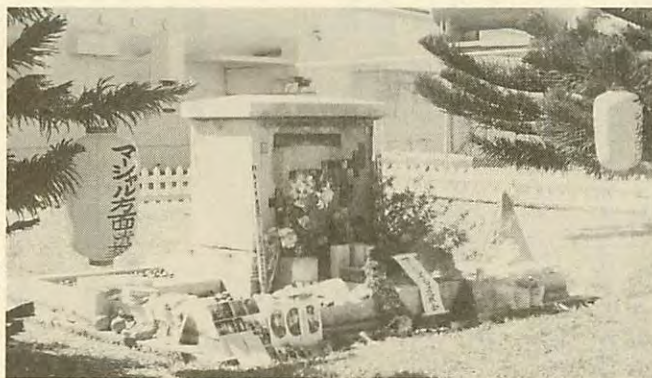
八月一日、最も暑い日の午後、九段会館に参集し、靖国神社に昇殿参拝後千鳥ヶ淵の墓苑に参拝して、無事に慰霊の旅ができることを祈った。

九段会館で結団式があり、一泊。八月二日早朝、バス二台で九段会館出発、渋滞もなく、成田到着。十時半コンチネンタル航空九六二便で、サイパンを経由して、三時四十五分(以下現地時間)グアムに到着、バスに分乗して、平和慰霊公苑の、我無山平和寺に参拝した。苑内はきれいに整地され立派な施設もあり、多くの方々が安らかに眠っておられる。

リーフホテルで一泊、グアムの夜景は美しかった。

八月三日、五時起床、朝食をすませ、八時半に離陸。チューク、ポンペイ、コスラエ、クエゼリンを経て午後七時マジユロに着き、バスに分乗したが途

中で故障し、やっと午後八時半にイースタン・ゲートホテルに到着した。小降りの雨が段々激しくなった。夕食に現地の山村要さんの参加あり十時



に終え、コテージにもどったところ、一人来診者あり、舌に大豆大の潰瘍があつて微熱もあり、処置する。シャワー室の電気がつかず、シャワーを浴びて眠りに就く。

八月四日、五時起床、五時四十分出発、マジユロの平和公園に着き、未だあたりは暗かった。六時三十分日の出を見る。慰霊祭を行ない、七時空港へ。

ここで朝食を摂って、十一時出発、クエゼリンに十二時に着く。アキ・ホー



ルさん宅で茶菓の接待を受ける。一時を過ぎたため昼食は抜きとなる。一時半空港へ行きクエゼリンからロイナムルへ飛び、午後四時慰霊祭を施行。クエゼリンにもどって軍食堂で夕食を摂って七時フェリーボートでエバイのアンロハサホテルに着き部屋割りの後六人同室で眠る。

八月五日、ホテルで朝食を摂って、フェリーボートでエバイからクエゼリンにもどりバスで日本人墓地に行き、最後の慰霊祭を行う。ここで多くの軍人軍属が玉碎した。クエゼリン、ルオット、マキン、タラワの諸島の御霊安かれと祈りを捧げ、御冥福を祈る。すべての慰霊の日程を終え、軍食堂で昼食を摂る、南洋特有の炎天下で長時間待たされた。

サンゴ礁の島の湾内は波静かで水清く、全くの平和そのもので、ここで五十年前に死闘がくりひろげられたとは到底思えない。夕方六時の飛行機でマジユロ経由、ホノルルに出発、日付変更線を通して午前〇時ホノルル空港に着き、バスでシエラトン・プリンセス・カイウラニ・ホテルに着く。偶然昨年泊ったホテルと同じで勝手を知ったホテルであった。一日ゆっくり休み、六日はパンチボールの国立墓地に参拝し、真珠湾等を見物して夜、解散会を兼ねて全員で会食をした。

最後の日になって同行者の中に佐竹エスさんと言う優秀な看護婦さん(元

養護教諭)の方がおられることも知った。

今回の旅では幸いに殆ど事故がなく、受診者も僅か二名でほんとうに有難いことであつたと感謝するとともに、かねて一度は訪ねてみたいと思つていたクエゼリン、ルオットで、親しく慰霊の出来たことを厚く御礼申し上げて拙文を終わります。

遥かなり兄の島(クエゼリン)

神奈川県 片山 計

昭和十九年二月四日、夢枕に「お母さん、水が欲しい」との兄の姿が出て来たという。日本との時差三時間、母と子の不思議な絆と言う他はない。

横須賀局気付ウ九〇ウー九の略号がマーシャル群島、クエゼリン第六通信隊と知るのはずと後の事で、米軍戦闘記録他、追跡調査を重ねて行く内にこの日付は残存の陸・海軍部隊約四百名程が最後の突撃を敢行した時空に当たるので。

クエゼリン、ルオットの玉碎が発表された時も、宮様(音羽侯)が戦死されるのだから、戦争が大きくなったんだねと話していました。

南洋群島にて戦死との公報があつたのは八月頃、今年と同じく暑い日で、無言で地面を叩く母の後ろ姿が今も尚、思い出されます。

二十四歳の生涯を風のように駆抜け

た長兄だったけれども、優しくして男らしく生命ある限り自分の脳裏から消えることはないでしょう。

マーシャルへは回を重ねて幾度び、今はクエゼリン島に母と姉の遺品を埋め、兄と共に南溟の星の下で悠久の中に眠っています。それは尽きる事の無い鎮魂の願いでもあるのです。

外海の白砂の海岸、輝く太陽、打寄せる波、それは怒涛の果ての感がしました。今は只々クエゼリン環礁に散った兄を含めた幾多の軍人、軍属の勇魂よ永遠なれと祈つてやみません。

(今回の墓参で兄と同期の通信兵の遺族、山森さんが見付かり驚きました)

春雄兄さん!

佐賀県 松永 タツ子

春雄兄さん、私は今、会長様、馬場様、佐竹様のお導きでここクエゼリンの碑の前に立つております。

長い間の御無沙汰をお詫びし、今回兄さんにお逢い出来た喜びに涙しております。

マーシャル遺族会のあることさえ知らずに、平成四年十一月二十六日より十二月十日迄、次兄冬雄兄さんの洋上慰霊祭に参加して、船上で兄さんの消息を、ずっと捜しておりましたところ、十二月九日の最後の夜になって、佐竹様にお逢いし、兄さんの消息が解りました。その際心温まる御配慮を頂きま

して、感謝致しております。これも兄さんの引き合わせと信じております。

十六年三月より十九年二月六日玉砕の日迄、どんなにか、つらい苦しい日々だった事でしよう。野菜不足で、野菜

の種を送ってくれる様にと兄さんの手紙にはいつも書いてありましたね。クエゼリンの土地には、「山東白菜」が良く育つので、その種を何回も送った事が、今でも忘れられません。今回の現地慰霊祭参加も、当時クエゼリンに、

十八年十二月迄勤務されていた、馬場直人様御夫妻がお誘い下さったお陰で、お参りが出来、当地に着くまで親身にお世話下さいましたことを、有難く思っております。

兄さん、今日は家族全員の写真を持って、貴方に、こんな大家族になった報告と、父の念願だった松永家の分家も二軒出来たことを報告致します。

これも、父の今までの働きと、私の主人の働き、それに兄さん達の思いで、出来たことと感謝致しております。

私も孫が五人おり多忙な毎日を通り過ぎております。時雄兄さんの、現地慰

霊が済んでいなくて心残りですが、今日は兄さんを迎えに参りました。私と一緒に両親や、家族の待つ、なつかしい我家へ帰りましょう。これで両親もきつと安心して、安らかに眠ってくれらる事と思います。どうか三人の兄さん達も、安らかに眠り下さい。合掌

(平成六年八月五日)

思い出すままに

神奈川県 吉田 正次

マーシャル方面遺族会の存在を知ったのが遅かったのは全く残念であるがそれでも今回の慰霊に間に合つて何よりも嬉しい。この機会を与えて下さった会長さん始め関係の方々には厚くお礼を、まず申し上げます。

ブラウン(エニウエトク)で私のすぐ下の弟が玉砕した。もう五十年になる。母の三十三回忌と一緒に繰り上げて五十回忌の法要をすませてから三年になる。

ブラウン島はブラウン環礁の約三十個の島の中では一番大きい、それでも東北に約四・七杆、中〇・三杆、標高は西端の小丘で五米に過ぎない。他にエンチャビ島、パリー島等があるが、宿泊施設がないのでマジュロ、クエゼリンが根據地となる。

八月四日五時五十分マジュロのホテルを出てマジュロ平和公園へ行く。供物、花輪を供え、海行かば他一曲を慰霊碑に捧げ、一同黙祷をした。終つてマジュロ空港を八時過ぎ、ブラウンに向つて出発した。飛行機は双発二十人乗りのセスナ機で、搭乗者は添乗員共

で十六名である。クエゼリン空港に着陸、ブラウンに向つたが燃料の都合で引返し、再出発し、ブラウンには十二時着いた。滑走路のすぐ両側は椰子の木

があり空港と云うには余りにも淋しい雰囲気。直ちに軽四輪に乗り集会所に向う。人家は見当らない。暫くして集会所と十部屋の宿泊室がある建物に案内される。太陽光線の眩しさ、そして暑さ。早速弁当を開く。窓越しに島民や子供の顔が覗く。

昼食後再び軽四輪に乗り、海岸の低い丘の所を選び、雑草や枯枝を取り除き、形ばかりの祭壇を設けた。国旗、マーシャル方面遺族会の慰霊牌を立て、各自が持参した線香、蠟燭、供物、神酒、其他故人の好物等を供えた。暑いのを承知で着用したワイシャツ、上衣、喪章はこの暑さで汗にまみれた。「海行かば」他一曲をテープに合せて歌い黙祷を捧げた。

思えば日本軍の装備は軽重機十四、迫撃砲十二、山砲二、軽戦車三、其の他、それに守備陣地の強固な構築は地勢上不能であるのに、一艦一機の来援もない絶望的な立地にあつて、米軍の圧倒的な空爆、艦砲射撃に曝される日本軍の気持は察するに余りがある。弟の心情を思い胸がこみ上げた。亡父母、高山に居る末弟に代つて弟の成仏を祈つた。

慰霊のあと記念撮影をし、後始末をすませた、小丘から斜面を下りるとすぐ海岸で、珊瑚礁の遥か向うは紺碧の海でその青さが目にしみる。この海岸数ヶ所遺骨代りに白砂、小石を拾つた。去り難い思いを残して元の集会所

に戻り、村長さんの所へ挨拶に行った班長さん副班長さん添乗員さんをついで、先程の海岸と反対側の海岸へ行き又、砂と小石を拾った。

空港へは軽四輪で戻り、十五時半にセスナ機は椰子の樹間の滑走路を走って離陸した。この歳(註 八十歳)では再び訪れる機会もあるまい。さようなら、ブラウン島よ。弟の魂魄よ、安らかに眠っておくれ。

セスナ機の窓から遙かにブラウンの島影が見える。もう一度さようならを呟いた。



念願のブラウン墓参

福島県 富田 ミツ

念願のブラウン島墓参がようやく叶い、八月四日第二班十五名は遠藤安男様を班長として八時にマジユロを出発、小型プロペラ機で、ブラウンに向いま

した。穏やかなエメラルドグリーン色の海を眼下に見下し、九時二十分クエゼリン着、給油後再び飛び立ったと思つたら三十分程で機長がオイル不足でクエゼリンへ戻るとのことです。

マジユロであれ程嚴重に荷物や、ひとりひとりの体重をチェックしたのに重量オーバーのためとはどうしたのかと思いました。十一時少し前、再びクエゼリン出発、やがてブラウン環礁を眼下に見下した時には、長い年月を待っていた弟に会えると思うと胸が一ぱいになりました。

この島で散華した事を今確かめることができたのだ、どんなに肉親を待っていたらだろうと思うと胸がつまり言葉では表現できませんでした。

ブラウンに到着したのはお昼近くです。誰も迎える人はなく、荷物運搬の小型トラックが三台待っていて、それに分乗して部落の集会所らしい所に行き、そこで昼食をしました。山口食堂の特製のおにぎり弁当と冷たい麦茶を頂き、そのおいしかったことは忘れられません。そのおにぎりを各人が残して持参して肉親の霊にお供えすることになりました。

祭壇は島の突端にある木の枝に日の丸を結び、遠藤様が手作りの上持参して下さったブラウン島戦没者之霊と書かれた立派な木の慰霊牌の前に、会で準備して下さった花輪、御神酒、水、煙草等の御供物、それに各人が持参し

た御霊の生前の好物をお供えし、会長様が準備して下さったテープを流して五十年前の激戦を偲び、故国に思いを馳せて散華された肉親の御冥福をお祈りしました。

この島は米軍の原爆実験場として戦後長い間、島民も立入る事は叶わなかったそうです。午前中のトラブルもあり滞在時間が短縮されましたため、お酒お水は撒き、御供物は運転手さん達にあげ、おにぎりは海に流して、御霊にお供えしました。

こんな孤島がなぜ日本の重要な軍事基地となったのかと思いました。島の中程に棧橋らしいのを見つけ、帰ってから生存者の方に尋ねたら、あれは昔海軍の水上飛行機の滑走路だったとのこと。島には椰子の樹だけで何もありません。写真を沢山写す予定でしたがそれもできずに終わりました。

五十年間待ちに待った墓参も僅か三時間足らずで島を離れるのは名残り惜しい思いで機内に入り、ブラウン島が見えなくなるまで窓を離れず暫く無言でおりました。マジユロに戻った時は今日の墓参を無事に果たした事を喜び、全員で安堵いたしました。日はとつぷり暮れ、美しい雲が流れておりました。その夜私が見た夢は、軍服姿の弟が母を迎えに来たと軍用車の中で待っているのです。その姿が家の御仏壇の写真と全く同じで驚いて目を覚まし

この度の墓参は会長様始め役員の方々
の並々ならぬご準備と団員の皆様の御
協力によりまして無事念願を果しまし
た事、また日本通運の皆様には大変お
世話になりました事を厚く御礼申し上
げます。

五十年祭現地慰霊

熊本県 青山 次則

平成六年八月五日、マーシャル諸島
慰霊巡拝の第四日目、愈々私達第三班
のマロエラップ現地慰霊の日がきた。

祭壇に供える果物、靖国神社の御神
酒、水、日本国旗、花輪、故郷の米で
作ったニギリ飯をバスに積み、マジユ
口空港に午前七時到着し、午前八時双
発のプロペラ機に搭乗、離陸した。

果てしなく続く紺碧の太平洋、澄み
渡った空、高度二千米の上空を一路マ
ロエラップに向う。約四十分でタロア
(マロエラップ環礁の一つ、旧第二五
二海軍航空隊のあった島)の滑走路に
着いた。

現地の人を出迎えて荷物を一輪車に
積み、島丸菜二さんの案内で墓地に向
った。砂浜の歩き難い海岸を一行は大汗
をかきながら三十分くらい歩いた。こ
れから椰子の林の中に入る。奥はジャ
ングルである。現地の若者達が道を切
り開きながら二百米位進んだところに
慰霊塔があった。しかし島丸さんの語
るところではこの先に墓地があったの

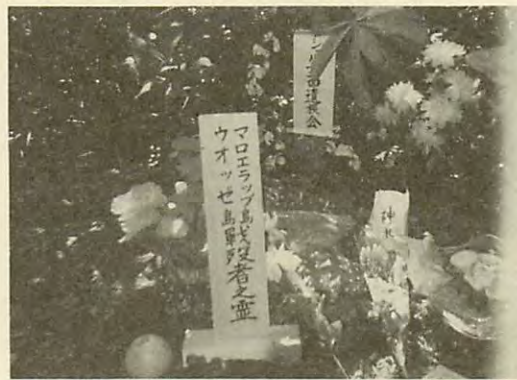
で、そこで慰霊祭を行うことになり、
又道を切り開いて百米くらい進んだ。
附近には米軍の爆弾で大きな窪みが残っ
ていた。こんなところに墓があったの
かと当時の状況を考えてみた。蒸し暑
い中、玉のような汗を流しながら祭壇
をつくり慰霊祭の準備にかかる。用意
したものを手際よく供え、準備完了。

午前十時慰霊祭開始。一同黙祷、お
線香を捧げて祈る。誰もほとんど口を
きかない。やがて佐藤敬義さんが準備
した、海ゆかばの曲が流れ、一同御霊
を偲んで、しばし感泣した。この地で
生き残ってこられた島丸さんはより複
雑な思いがあったのでしよう号泣し、
しばしその場を離れることが出来なく
なった。祭事が終ると一同神酒を酌み
交わし、現地の人達にもニギリ飯と果
物を食べてもらい、私達の気持を伝え
た。(私は墓地附近の石と砂を採って
歸り八月十五日お盆の日に骨壺に入れ
お墓に納めた)

帰りにタロアの村長さんに訪問の趣
旨とプレゼントの品を手渡し、又再度
来島することを約束してお別れした。
ここで通訳にあたった人は戦時中タ
ロアで日本軍の炊事を手伝った人で現
在六十八歳、よく世話の行きとどく人
である。島民の人も皆愛想よく親切で
友好的な人が多い。

戦死した兄の五十回忌も昨年すませ
今回の現地慰霊祭に参加でき、兄の最
後の地に詣でることができた事を一番

喜んで居るのは、今は亡き父母ではな
いかと思ひ、この孤島で、敵の砲爆撃
のほか飢えとの戦で亡くなられた多く
の同胞の魂のご安泰を祈りながら帰
りの飛行機に搭乗した。



五十年祭の現地慰霊

宮崎県 山内 正隆

マーシャルの墓参から帰ってきて早
くも一ヶ月が過ぎようとしております。

会長様はじめ皆様方、御元気で経過
ごしのことと思ひます。その節は皆様
方に大変お世話になりました。あつく
御礼を申し上げます。私共は八月十日
の夜、宮崎に帰りました。今は旅のつ
かれも取れて元気で過ごしています。
自分は始めての墓参でした。父の戦死



した頃の事も知りません。唯母の話を
聞いて知るのみでした。一度はマロエ
ラップ島という所に行つて、父の戦死
した場所を尋ねて見たいと心に思つて
おりましたので、今度行く事が出来て
大変喜んで居ります。

会長様や叔父のおかげと感謝致して
おります。有難うございました。

初めて見る南の島や海の美しさを実
感いたしました。佐藤敬義様や青山次
則様といっしょでしたので、楽しく行
動も出来て母も喜んでおりました。
先づマジユロでの慰霊祭、今は平和



な時代で五十年前に戦争があつて、東太平洋の遠い島で英霊が遠い日本の国を見守っているのだらうと感じました。八月五日いよいよ待望のマロエラップに行く日です。一行は荷物をかかえて飛行機に乗り、眼下に小さな島をさがしているうちに飛行機は着陸しました。乗務員の方に、「ありがとうございます」と言った。母は、「山村」という名前にきづいてお尋ねしたところ、「僕は「要」の息子です。祖父が日本人でした」と話して下さいました。遠い南の国でなつかしそくに交す言葉は旅のほほえましいひとこまでした。叔父を先頭に戦友を埋葬した場所を

さがして山の中へと進み、あと五十メートルだけでしたが、どうしても中へは行けないのであきらめ、少しでも近い場所に祭壇を作りました。本格的にお祭りを行なうはずでしたが、先日より佐藤様が体調をこわして出来ませんので会から用意して下さいたテープを流して、一人ずつお参りをしました。叔父(註 鳥丸栄二)は「この島マロエラップで戦死された戦友の皆さんもいっしょに墓参りをと、長い間思っていました。やっと念願がかない、いっしょに来る事が出来ました」と戦友や義兄に語りかけておりました。

それぞれがお参りをして、帰り道に元あつた墓地で再びお参りをし、心おきなく墓参りが出来ました。ハワイ島に行き良い見学をさせても

らいました。またの機会がありましたらぜひ参加させてもらいたいと思っております。皆々様、御自愛の程を祈ります。

ウオツゼ、マロエラップに眠る戦友を訪ねて

会友 秋元輝夫

(駆三三三部隊)

隊員の殆どが栄養失調症となつて、軀が鉛の様になり、重い足を引き摺りながら一年八ヶ月の激闘と、隊員の五分の四以上を失つたウオツゼ島に別れ、海防艦「あまぎ」に収容された。真っ赤な夕日の中に浮かぶ鳥影を眺めながら、「生きて居たら必ず墓参にまいります」と甲板に張られたロープを握り締め、心に誓つたのは昭和二十年十月二十五日であつた。

田中広守 渡辺孝一
昭和五十六年四月十四日(火) 日本交通公社の添乗員と共に成田発、同日はグアム泊まり。
四月十五日(水) グアム島の戦跡を巡り、午後十一時五十分マジユロ空港に着いた。日系の山村カナメさんたちが出迎えて下さつた。
四月十六日(木) 島内見学、カプア大統領を表敬訪問する。
四月十七日(金) 九時三十分、小型のチャーター機でマジユロ発、十時少しすぎにマロエラップが見えてきた。

戦後の混乱の中で生活の立て直しにその日その日を送りながらも、マーシャルの孤島に残してきた戦友に誓つた墓参の約束は、私の心の奥底に絶えず焼きついてきた。昭和五十五年に入り島々に小型機が飛ぶ様になつた事を聞き、生還者一同に連絡して慰霊団を組んだ。参加者は次のように決定した。

ウオツゼ島関係 七名
秋元輝夫 同夫人 片桐武夫 同夫人
邑 義宣 畔柳良一 和田正嗣
マロエラップ関係 五名
小沢篤行 日下部義徳 同夫人

我々の部隊は、戦局とみに厳しくなつた昭和十八年十一月、関東軍第三独立守備隊司令部「独歩11、独歩15、独歩16大隊」を基幹とし、チチハル、ハルピン方面に展開中の部隊より要員が補充され、海上機動第一旅団「駆三三三〇」(三三三九部隊)と改編。隊員三九四二名は同年十二月七日満州の駐屯地

◆ ◆ ◆

小沢篤行 日下部義徳 同夫人



い何の発表もなかった。
我々は守備地の違った関係で玉砕は免れたが、一切の補給がとどえ、終戦時辛うじて生還できた者は、ウオツゼ島守備の第四中隊と本部先発員十名を含む合計二〇六名中の四一名、マロエラップ島守備第六中隊の二〇九名中六一名と云う僅かな人数であった。

◇ ◇ ◇

あの時、何故酷寒の北満奥地より転進してこの島を守らなければならなかったのか、そして我々の青春の全てを捧げて戦わねばならなかったのか、多くの有能な戦士達は太平洋の防波堤となり、祖国の平和と安泰を願いながら散華して逝かれたのである。
四月十九日(日) 目的を果したとは云うものの、後ろ髪引かれる思いでマジュロ発二十日全員無事帰国した。
以下同行者の感想文の一部を紹介します。

◎山形県 片桐武夫

ウオツゼ墓参の計画を知らされたが私は昭和三十八年に病で倒れ、皆と同一行動ができないので到底許されないと考えた。しかし、散華された戦友のあの顔、この顔を思うとジツとして居られない衝動に駆られ、這ってでも行きたいと考えた。幸に、妻が介添えとして同行してくれ、戦友たちの激励に支えられたお蔭で思いがけなくも永年の夢が叶えられた。

環礁「ミレー抄」(19)

会友 成宮 芳三郎

(第66警備隊軍医長)

「下駄は重い」と呼びかけていた。「下駄は重い」と思っ、草履にしました」との言葉に新たな涙が頬を伝わる。」
私はこの報告誌を、待ちきれず帰りの車中で読み耽った。涙、涙、そして涙、「下駄は重い」と思っ、(ぞうり)にした」と云うところで思わず慟哭した。帰宅して家族と語り合った。毎日毎日読んで戦友の芳名録を佛前に手向けた。「下駄は重いと思っ」の一言に、虫やねずみを漁った孤島の栄養失調生活が思い出されます。
それぞれに、あたら若い生命を国に捧げられた南十字星の彼方を思い、今改めて悼みと悲しみの念で黙祷合掌する次第です。

を夫々出発し、朝鮮斧山で合流、マーシャル群島に向かい、翌十九年正月、部隊はマーシャル群島のエニウエトク、クエゼリン、ウオツゼ、マロエラップの各島に分散上陸し防備に就いた。しかし、陣地構築、戦備の整わぬ一月下旬に、早くもクエゼリンほかが主要陣地に米軍の大攻撃が開始され、徹底的な砲撃の後、二月一日大挙して、クエゼリン、ルオットに上陸を開始、死闘数日、圧倒的な敵を迎討つて、クエゼリン島守備の機動第二大隊主力駆三一二部隊は二月六日同島守備の海軍部隊と共に全員玉砕し、続いてエニウエトク環礁守備の旅団主力も激戦の末二月二十四日全員華々しく玉砕を遂げました。

大本営は、昨年五月のアツツ島、十一月のマキン、タラワ、本年二月のクエゼリン、ルオット各島の玉砕はそのまま発表したが、エニウエトクについては、士気に及ぼす影響を憂いてか、つ

島民の見守るなか、急いで祭壇を作り日本から持参した松の墓標を立て、一対の花輪、飯盒で炊いた銀飯、葱の味噌汁、日本酒に大福餅、日本の煙草等々を、一同は只々興奮状態で、涙と汗を拭くことも忘れ、「おーい！戦友よ！俺達が来たぞ、寂しかったろうな！残念だったろうな、サア、これを腹一杯食べてくれ」と話しかけ乍ら祭壇に供えた。線香の煙が風のない内海の海辺に高く静かに流れる。元小隊長の邑(むら)さん(現在妙清寺住職)の読経が、島に眠る多くの戦友の涙声に聞こえる。

鳥の方々へのおみやげの、雑貨、文房具、食品などをさし上げ、昼食を共にして、三時半迎えの飛行機でマジュロに帰った。

四月十八日(土)も昨日と全く同じようにウオツゼでの慰霊墓参を行った。

◎石川県 邑 義宣
昨年(五十五年)の慰霊祭の時、ウオツゼ、マロエラップ墓参に参加した小賀坂 四郎氏の報告誌を頂いたが、その中に次の一文があった。
「同行の中村文子さんの読経が続く中に合掌瞑目する。瞼の中に亡き戦友の姿が浮ぶ。遺族の小早川宗吉さんは亡き父のため、単衣の着物と草履を供え、お題目を上げ、「一緒に日本へかえり

泣かぬ日は一日もなしとふ一行を夜半にめざめてふと思ひ出す
一千の命をここまで伝へたる
はつかに残りし南瓜の種子
栄養失調死一も遂に出さざりき
ひそけき誇り元分隊長我が
戦はつひに終りぬ敵艦の
美しき灯見れば何かねたまし
大空に舞ひたち飛びゆく最後機は
視野はろぼろと見えなくなりゆく

お便りの中から

奈良県 山中 美子

いく分しのぎ良くなったとはいえ、毎日お暑い日がつづきます。空は青く晴れ渡り、一寸も雨が降りません。

この度の旅では本当にお世話様に感謝の申し上げようもございません。お蔭様で戦後五十年たつてやっと兄の墓地にお参りが出来、行って良かったと痛感致して居ります。其の後お変わりなくお元気にお暮らしの御様子、何よりと嬉しく存じます。

本日はルオットの写真を沢山送って頂き有難うございました。

野戦病院の写真、ちゃんと送って下さつてすみません。軍医の兄は、あそこで最期に自決をしたのだと思います。写真を見ますと涙がこみあげて来てなりません。大学を出てすぐ軍医になり、十六年にマーシャルに行き開戦直前に日本に帰り、十七年―十八年は旅順の海軍病院にいましたが、十八年四月に再びマーシャルに行き、帰らぬ人となりました。この時は死を覚悟で出発したようです。

学生時代のノートも今では遺品となり、私の手許にあります。きれいな字で書いてあり、私の息子達も感心している位です。海軍の軍服での写真もかかっていますが、いつまでも若く

てりりしい姿です。私はすっかり年をとりましたが、兄はいつまでも若いのです。野戦病院のあとへ是非行きたかったです。何だか五十年たった今も生々しくて泣けて仕方ありません。四国の

松山から来られた松友さんの兄上も、海兵を出られ二十四歳の若さで沖繩の海に散華された由、沢山の優秀な若者が戦争の為に散つて行ったのですね。

どんな事があつても戦争はいやですね。また私が礼拝している写真もとつて下さつて、すこしも気づきませんでした。有難うございました。また参拝する機会がございましたらお報らせ下さいませ。ルオットでは兄が私の名前を呼んでいるように思いました。きつと待つてくれたのでしょうか。

聞くところによりますと、米国の軍人でさえ、クエゼリンもルオットもなかなか入れないところだとか。会のおかげでゆつくり墓参ができ、その上クエゼリンに宿泊という貴重な体験をさせて頂きとても意義ある旅だったと感謝致して居ります。私の方からお礼状をと思つてましたのに先に写真を送って頂き申し訳ありませんでした。私も一週間位眠たくてボーッとしておりましたがやつと元にもどりました。

まだまだ残暑がつづきますゆえ、くれぐれも御自愛下さいませ。

末筆ですが本部役員の皆様によりしくお伝え下さいますようお願いいたします。

東京都 田島 智恵子

慰霊祭へ行く前はこんなに暑くてまぶしくては、赤道直下はどんな事になるかと思つていました。今は平和で静かで明るいなんと美しい雲、青い空、白い砂浜、ここが三千人もの人達の苦しい地獄であつたととても考える事ができません。

絵を書く事が好きな父はどんなに楽しくスケッチが出来たでしょう。

戦時中、小学四年の頃、母の実家に疎開している時「総領だからしつかりして頂戴」と両手を母にギュウツと握られました。父の戦死した知らせでした。あの時は冬で、とても寒く今でもさびしくて良く覚えています。

今、母は足を悪くして遠出は出来なのです。姉妹三人でお参りしても、母一人の思いを満たす事は出来ませんが「元氣に行つてこられて良かった」と今度は優しく手を握つてくれました。ブラウン島へは一度はどうしても行かなくてはならない気がありました。やさしい皆様と参加する事が出来、今とても満足しています。

今日も又、南の島に負けなくらい厳しい暑日が続きますが、平和な時代を生きられる幸せを感じています。

父 間々田 混命
母 間々田 やす

会友 佐藤 敬義

拝啓、晩秋の候益々御清栄のこととお慶び申し上げます。

現地慰霊の折は大変お世話になりました。またこの度はハワイ慰霊の全員の写真をお送り頂き誠にありがとうございました。厚くお礼を申し上げます。

過日は御電話を頂き感謝にたえません。後で思い出しましたがマロエラップの飛行場で飛行機を背にして全員で写真を撮りました。あの時、二人ほど撮つたはずですが、どなたでしたかお尋ね頂けるとありがたいです。まずはお礼かたがたお願い迄。 敬具

~~~~~  
お心あたりの方は佐藤様に御連絡ください。

住所 福島県伊達郡伊達町

字鶴田四一三

## 計 報

元篤志会員 村岡達志様は、平成六年七月七日心不全のため、御歳八十五歳を以て逝去されました。

村岡様は、元海軍主計中佐で、戦後は復員業務に携わり後、厚生省援護局業務第二課長を長くつとめられ、本会には特に大層お世話になりました。

## 明治天皇とハワイ皇帝カルカウア

お茶の水女子大学名誉教授 勝部 真長

わが国技といはれる大相撲も、関脇高見山(現東関親方)を皮切りに、小錦、曙、武蔵丸と、ハワイ出身の力士が、上位を占めて、ついに曙のひとり横綱となるに及ぶとは、今後もぞくぞくとハワイ勢が、土俵にその威力を発揮するであらうとおもふと、ハワイと日本との因縁の深さを思はずにはゐられない。

万延元年(一八六〇)三月、勝海舟の乗った威臨丸が、サンフランシスコからの帰り、太平洋の真中に浮ぶサンドウイツチ諸島のホノルル港に入り、王宮に表敬訪問して、カメハメハ国王に謁見したことがあつた。

国王は、日本軍艦の来たのを大へん喜んで、「明年は、予、日本皇帝を訪ねて、貴国に到るべし」と約束された。

ハワイは、一七七八年英国の船乗ジェームス・クックが発見した島で、米国と極東を結ぶ太平洋上の通商・捕鯨の寄留地として、平和な王国であつた。しかし米国の宣教師が大量に入りこみ、砂糖・パイナップルの栽培をするやうになり、この土地の2/3を支配するや

うになる。また米国としては、真珠港を海軍基地として使用する独占権を得て、ハワイを他国に占領されなくなつた。といふのは一八四九年、フランスがホノルルを占領したことがあつたからである。

一八八一年(明治十四年)三月、ハワイ皇帝アリー・カルカウア(匿名)は、東洋諸国順遊の途中、横浜に寄航した。侍従長のはかに移住民事務長官を同伴したのは、日本人移民を多数招きたいため、日本との条約を結びたい、といふのであつた。

明治天皇(御年三十)は、これを国賓として迎へ給ひ、浜離宮にあつた迎賓館・延遼館を宿舎にあてられ、嘉彰親王を御用掛りとし、手厚く接待なされた。

ハワイ皇帝は初め三日滞在の予定であつたが、ちやうど日比谷で観兵式をするところであつたから、それを観たいといふので、三月八日の寒風に雪も降るなかを、見物したのであつた。

三月十一日午後、皇帝は、天皇と密談を望まれ、外相井上馨が通訳して、三人のみで話し合つた。それは、欧州

諸国は利己を主義とし、他国の不利を顧みず、一致して東洋諸国を圧迫する。今や東洋諸国の急務は、連盟して、これに対峙するにあり、日本は進歩著しく、人民は勇敢である。陛下、進んでこの盟主とならば、予は陛下に臣事し、大いに力を致さん、といふのであつた。

天皇答へて、貴説傾聴せり、されど清国は大国にして、かつ傲慢不遜の風あり、清国との和好すらむずかし、貴説の遂行は難事に属す、なお閣臣に諮り、熟考して答ふべし、と。会談一時間二十分の後、皇帝は、皇姪カピオラニを、定磨王に配せんことを切望した。嘉彰親王の息、定磨王が海軍兵学校の制服で延遼館に出入されるのを見て、いたく気に入られたのである。

外国皇室と婚姻を通ずることは、累(わさお)を将来に及ぼすのおそれありとして、井上外務卿は反対したのであつた。

一八九一年(明治二十四年)ハワイ国の王位についたのは、女王リリオカラニであつた。彼女は、ハワイ人のためのハワイを主張し、勅令による新憲法を制定しやうとした。自分らの地位・財産を失ふことを恐れたハワイのアメリカ人は、革命を計画。ハワイ駐在公使ジョン・スチーヴンスの援助で、折からホノルル碇泊中の米国軍艦から百五十名以上の水兵を動員し、女王の王宮を包囲した。これで革命は簡単に終り、女王は退位を余儀なくされ、ハワイが米国の保護領であることを宣言

し、米大統領に、ハワイ合併を要求した。

一ヶ月して、米国はハワイ合併条約を結び、これを上院に提出し、米国がハワイをとらなければ、日本または英国が、ハワイをとるであらう、といふ宣伝が行はれた。

一八九三年三月、新大統領は民主党のクリーヴランドで、彼は反帝国主義者であつた。彼は条約案の撤回を求め、下院議員プロウントにハワイの調査を命じた。プロウントは、ハワイにゆき、水兵を軍艦にもどし、米国旗を下ろさせ、米公使が革命に干渉し、住民の大多数が合併に反対であることを報告した。かくてハワイ合併は中止されたが、女王の復位は実現しなかつた。女王の悲痛な、民衆へ訴へる愛国的な演説が行はれただけであつた。

クリーヴランドの次に共和党のマツキンレーが大統領になると、一八九七年六月、新合併条約が調印された。米西戦争が始まり、ハワイはフィリピンへの補給基地として重要視されたからである。一九〇〇年、ハワイは准州となり、一九〇〇年、ハワイは米国五十五番目の州となつた。これも侵略である。

明治神宮社報「代々木」  
平成五年十一月号より転載

### 明治天皇御製

(明治四十二年)

もみぢばの 赤きこころを 靖國の  
神のみたまも めでてみるらむ

〔十一月拝殿掲示〕

## 靖國神社だより

### 勅使参向のもとに

#### 秋季例大祭盛大に齋行

中門前幄舎にかざられた奉納の大輪菊花咲きはこる十月十七日から十九日の三日間に亘り、秋季例大祭が盛大かつ厳肅に執り行われた。

例大祭にあたり、先ず、宮司以下全神職は十六日夕刻から齋戒、参籠に入り、翌十七日午後三時拝殿南側前庭に於て「清祓ノ儀」を執行。引続き御本殿に進み、例大祭のつがなき奉仕を祈る「本殿ノ儀」を執行した。

同日午後七時、境内の灯を一切消した暗闇の中、「第百十九回靈璽奉安祭」が厳肅に執り行われ、新たに十五柱の神璽が御本殿正床に奉遷、お祀りされた。

翌十八日「当日祭」は、日本遺族会、英霊にこたえる会、靖國神社奉賛会の各会長又は代理、靖國神社崇敬者総代

戦友・崇敬者など拝殿狭しとばかり参列して執行された。

また午後六時には、祭典の無事終了したことを奉告する「直会ノ儀」を執行し、三日間に亘る盛儀は滞りなく終了した。

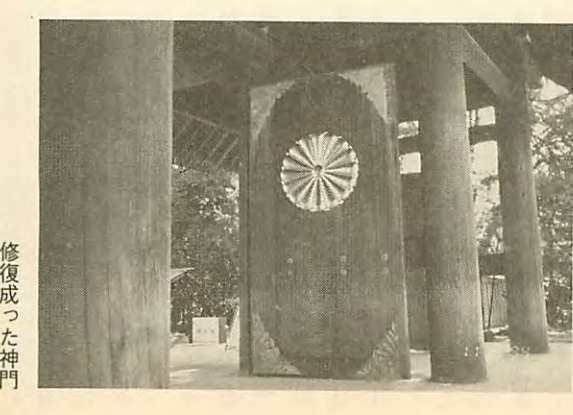


夏の間中境内に青々とした木蔭をつくり、参拝者を暑さから和らげてくれた葉桜も今ではすっかり紅葉し、音もなく一ひら一ひらと散る季節となった。▼秋季例大祭は好天に恵まれ、十月十七日から三日間、厳肅盛大に齋行することが出来た。これも偏に、御遺族・戦友・崇敬者各位の御奉賛御協力のお蔭であり、深く感謝の意を表したい。▼例大祭に奉獻される神饌品や献備品の中には、戦中戦後を通じて変わらぬ崇敬の誠を捧げ、且つ引き継がれているものがある。茨城県

納は、只管靖國の神靈への感謝と崇高なる御精神にお応え申し上げたいとする、奉納者の純一無雑な真心であろう。▼過日、遺族会の団体参拝で上京された老婦人が、大きな風呂敷包みを提げて受付に来られ、曲った背骨を伸ばしながら話された。「今年、家で採れた米と栗を持って来ました。僅かばかりですがお供えして下さい」と。包みを手渡された筆者の両手には、老婦人の手の温もりと、実際の重さよりも遙かはずしりとした重みを感じられた▼靖國神社はこれからも、これら崇敬者一人一人の赤誠によって支えられ、神社職員もまた、この真心の重みを忘れることなく神前奉仕に務めて行きたい。

「國の鎮」を奏する中、御内陣の御屏が開かれ、神饌が供えられた。次いで宮司御神前に進み、昨夜新たに神璽をお迎えしたことを奉告すると共に英霊の安鎮と世界の平和を祈念する祝詞を奏上。十時三十分、参列者謹んでお迎え申し上げる中、勅使本多康忠掌典本殿に参進。御弊物を奉獻し、大御心のままに御祭文を奏上せられた。勅使退下後、「鎮魂頌」の献楽の後、特別参列者が玉串を奉りて拝礼。その後宮司拝殿に降り参列者に対し御挨拶を申し上げた。

翌十九日の「第二日祭」は崇敬者総代をはじめ、全国から参集した御遺族・戦友・崇敬者など拝殿狭しとばかり参列して執行された。また午後六時には、祭典の無事終了したことを奉告する「直会ノ儀」を執行し、三日間に亘る盛儀は滞りなく終了した。

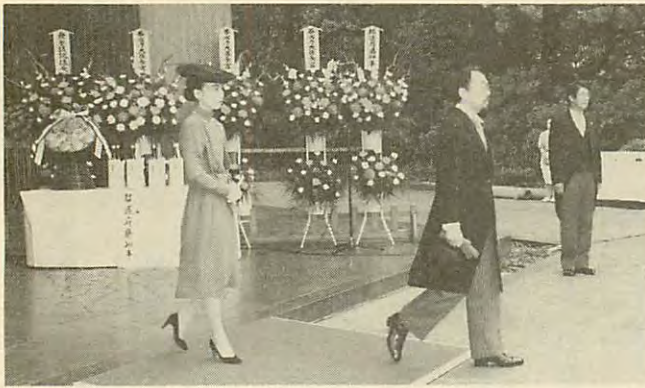


修復成った神門

千鳥ヶ淵 秋季慰霊祭 戦没者墓苑

当奉仕会主催の戦終四十九周年記念の秋季慰霊祭は、十月十八日(火)、爽やかな秋日和に恵まれて、三笠宮寛仁親王同妃両殿下の御臨席を仰ぎ、内閣総理大臣代理、参議院議長、及び厚生大臣・環境庁・防衛庁各長官代理、日本遺族会・英霊にこたえる会各会長代理、自民、公明、民社各政党代表、都道府県知事代表、遺族会・戦友会代表、各協賛団体代表、陸海空自衛隊の部隊、更に高校生等千数百名が参列し、盛大に挙行された。

この日、幕前には寛仁親王同妃両殿下御下賜の大きな花籠を中心に村山内閣総理大臣、最高裁長官、衆参両院議長、各省庁大臣・長官、都道府県知事、協賛団体等から供えられた馥郁たる香りの菊の生花が飾られていた。



午後一時やや前、航空自衛隊中央音楽隊の奏楽のうちに両殿下が御臨席に  
なられた。

式典は折口信夫作の鎮魂頌を堀越高等学校生徒五十名の格調高い斉唱に始まり、開式の辞のあと参列者一同、国歌君ケ代斉唱、次いで海老原宗陽先生が墓前に進み献茶の儀を果たされた。

続いて瀬島奉仕会会長が次項の式辞を述べられたが、式場は肅然たる気に包まれた。

このあと白石伯鵬氏が昭和天皇御製を朗々と吟詠し、雅楽道友会の柴山吉明氏が古式豊かな陵王の舞を奉納され、参列者一同の眼が注がれた。

続いて石原内閣官房副長官が総理大臣の追悼の辞を代読されたが、恒久の平和を強く求める言葉が盛られていた。やがて参列者一同起立するなか、両殿下には席を立たれて幕前にお進みの上、御拝礼をなされ、続いて黙禱を捧げられた。参列者は御一緒に拝礼し、戦没者の御霊の御平安を祈ったが、式場肅として静寂となるなか、戦中、戦

後の様々な思いが去来した。御拝礼を終えられて両殿下は、遺族席の人々に温い御会釈を賜わりながら御退場なされた。

このあと陸海空自衛隊の代表部隊の参拝、陸海各自衛隊音楽隊の慰霊献奏が行われ、祭典の圧巻であった。来賓献花も整齊と進められたが、都道府県遺族代表が感慨深く拝礼をされていたのが印象に残る。

式 辞

澄みわたる秋空の本日、三笠宮寛仁親王殿下同妃両殿下の御臨席を仰ぎ、御遺族の皆様、御来賓多数のご参列を得て、今次大戦において散華されました戦没者に哀悼の誠を捧げる秋季慰霊祭を挙行出来まことは、誠に感激に堪えないところであります。

歳月の流れは速く、早くも終戦四十九周年を迎えましたが、あの激しかった大戦において、戦没された将士は、二百数十万人にのぼり、今更のように惨烈悲愴の戦争を想起し、また戦場や本土において、戦争の犠牲になられた多くの民間の方々の御最後が偲ばれ、痛惜の情、切々と胸に迫るを禁じ得ません。私共は、ここに式場を浄め、祭壇を設け、軍人、民間の方を問わず、国難に殉ぜられた戦没者に対し、心から哀悼の誠を捧げ、謹んでそご冥福をお祈り申し上げたいと思います。

当墓苑には現在三十三万六千余柱の

ご遺骨が奉安されております。政府におかれては現在も尚、海外における遺骨収集を続けておられますので、今後とも御納骨数は更に増加するものと思われまます。

しかし乍ら、未だに多くの戦没将士が、草むす屍、水漬く屍となつて、南溟の旧戦場に、或いは朝北のシベリアに残されていることは、誠に痛恨に堪えないところであり、御遺族のご心情もさぞかしと拝察し、深くご同情を申し上げます。

現在の世界は、冷戦の終結にも拘らず、民族紛争があとを絶たず、宗教経済問題も複雑に流動し、不安定な情勢が続いておりますが、わが国においては、幸いにして平和を保ち経済発展を続けておりますことは、御同慶に堪えないところであります。

これ等のことは、正に祖国愛と同胞愛に、尊い生命を捧げられた戦没者の礎の上に築かれていることを忘れることなく、あの苦難の戦場で、国難に殉ぜられた戦没者の心を心とし、誤れる風潮に惑わされることなく、今後とも健全な平和国家の建設に更に努力して参らねばならないと存じます。

私共墓苑奉仕会は、墓苑を全国民的な聖苑として、幅広くかつ末永く奉賛し、戦没者慰霊顕彰の実が更に揚がるよう努めておりますが、各方面から多大のご協力を得ていることに、厚く感謝申し上げます。

最後になります。時を経るに従い戦没者崇敬の思想がとすれば薄れゆく。昨今の世相に鑑み、次代を担う若い世代への周知伝承の輪を広げるためにも、皆様方の格別の御配慮、御協力をお願い申し上げます。

本日は、誠に有難うございました。  
平成六年十月十八日  
財団法人千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会  
会長 瀬島 龍三

### “お元気ですか” コーナー開設について

この度本会は、会員、会友同志の親睦と交流を深めるのに役立つよう“環礁”誌上に“お元気ですか”コーナーを設けることとしましたので、あなたもお気軽に投稿下さい。

内容、字数などに制限はありませんが次の項目の中から幾つかを選んで書いて頂きますと編集上好都合です。

- 一 お元気ですか
- 二 差支えなければお歳は
- 三 ご家族の状況
- 四 心に残る思い出
- 五 “環礁”に対するご意見
- 六 趣味、おけい古ごとなど
- 七 当会への御要望
- 八 その他何なりとも

はがき、便箋、電話など何でも結構です。掲載に際して若干の修正はご一任下さい。

## 寄付者芳名

(敬称略・順不同)

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。

- 今後とも本会の永年存続のため御協賛を切にお願い申し上げます。
- |       |             |            |       |
|-------|-------------|------------|-------|
| 北海道   | 伊藤 フジ       | 福岡県        | 深川 美由 |
| 宮城県   | 新田富美子       | 長崎県        | 大石 春見 |
| 埼玉県   | 井沢 なを       | 鹿児島県       | 丸田 キワ |
| 千葉県   | 高山 貞男       | 篤志会員・会友等   | 江村 源次 |
| 宮崎 實  |             | 小島 温 豊谷 秀光 |       |
| 東京都   | 内海 静枝 佐竹 エス | 古木 秀策 中田 勇 |       |
| 鈴木梅太郎 |             |            |       |
| 神奈川県  | 田中トメノ 平松 菊枝 |            |       |
| 長野県   | 織部はつゑ 神田 環  |            |       |
| 京都府   | 川本 彦次 寺西 信也 |            |       |
| 香川県   | 石川 正興       |            |       |

### 五十年祭記念誌刊行について

当会は、五十年祭記念行事の一貫として記念誌を発行することとし、五十年祭委員会が企画の上、編集委員を委嘱して作業を進めてまいりました。

昨年九月四日の五十年祭委員会の折、頭初の計画の一部を修正することとなり、目下編集委員の総力をあげて作業中ですが、完成予定時期が、本年一月末から、二月末に変更の已むなきになりました。

お待ちかねの方も多いことと思いますが、ご寛容下さるようお願いいたします。

なお、最近記念誌が無料となる案件についてのお問い合わせがありましたので参考のため申し添えます。

「環礁」60号3頁「五十年祭記念誌を刊行します」の中に、「四、平成六年分を含む会費三ヶ年以上完納の会員、会友に一部を無料で進呈します」

とありますが、これは、連続した三ヶ年以上の分を平成六年中に完納した方の趣旨でありますので御了承下さい。

有料配布を希望される方には、在庫限りご要望に応じられますので、なるべくお早めに申込み下さい。

## 名簿訂正

(7) ◎ 平成3年8月15日発行の会員名簿を次のとおり訂正いたします。

| <頁> | <氏名>  | <訂正事項>                                                       |
|-----|-------|--------------------------------------------------------------|
| 42  | 岩田とし子 | 〒224 横浜市港北区を都築区に変更                                           |
| 44  | 鈴木孝輔  | 〒224 横浜市港北区を都築区に変更                                           |
| 44  | 谷達也   | 〒227 横浜市緑区を青葉区に変更                                            |
| 44  | 橋田正幸  | 〒211 川崎市中原区小杉町1-403-4パロス武蔵小杉401号に変更                          |
| 51  | 神田正環  | 〒399-82 長野県南安曇郡豊科町豊科4859 ☎0263-73-8100に変更                    |
| 69  | 長谷土松  | 〒850 長崎市本河内町1648 ☎0958-26-7031 戦没者長谷仙一 続柄弟 所属部隊66警戦没地ミレ<新入会> |
| 76  | 浅川貢男  | 〒259-12 平塚市ふじみ野2-32-5 ☎0463-58-6137 備考195白桜会<新入会>            |
| 76  | 遠藤治昭  | 〒080 帯広市稲田町東1線39-11 ☎0155-48-6531 備考195白桜会<新入会>              |
| 77  | 笹野中   | 〒152 東京都目黒区中根2-10-3 ☎03-3718-8474 備考195白桜会<新入会>              |
| 78  | 野伴昭   | 〒420 静岡市千代田3-11-62-8 ☎0542-45-3536 備考195白桜会<新入会>             |
| 78  |       | 〒174 東京都板橋区志村1-18-17 ☎03-3968-0856 備考195白桜会<新入会>             |

(1頁より)

四月八日、靖国会館での直会に参加する方の参加費は、二月末日迄に郵便振替でお振り込み下さい。今回は旅行をやめて、全員がゆっくり会食、懇談できるように企画しました。

◎四月七日と八日の宿泊を左記の本郷館に予約しました。

〒113 文京区本郷一―三―一―〇  
ホテル 本郷館

電話 〇三―八―一―六―二―三―六

宿泊を希望される方は、料金一人九三〇〇円(一泊二食付)を二月末迄に本部宛お振り込み下さい。受付次第ホテルのパンフレットをお送りします。

◎今年も終戦五十年のため靖国神社参拝者が多く、特に四月八日は最高の賑わいとなると思われます。受付付近の混雑が予想されますので、年会費、寄付、直会参加費、ホテル宿泊料などはなるべく二月末までに手続きをすませて下さい。

当日の受付は、原則として参加の確認だけといたしたいと思います。

### 『環礁』座談会の予告

平成三年以来毎年行なってきました座談会を、今年も四月二十三日(日)と予定しています。今回は、ギルバート関係のほか希望する方はどなたでも御参加下さい。

参加を希望される方は、同封のものが

きにその旨お書き下さい。日時、場所が確定しましたら申込まれた方に、お知らせいたします。

靖国神社を崇敬しお護りする  
奉賛会に入会しましょう  
護国の英霊の鎮ります靖国神社の末長き御安泰のために、御祭神に最も身近かな私どもは全員が奉賛会に入会しましょう

### 本部だより

☆五十年祭も済み、皆様のご家庭でも五十回忌その他の法要などを済ませられたことと思います。五十年祭という大きな節目を越えましたが、英霊と私どもの係わりは変わることはありません。相共に慰霊の誠をつくしましょう。

☆今後、御縁のできた会員、会友同志の一層の親睦をはかるために、『環礁』誌を積極的に活用してほしいと思います。皆様の身近な出来ごとをお知らせ下さい。

和歌、俳句、川柳、書道、民謡、謠、料理などを勉強、おけい古をしている方、ハイキング、ゲートボール、釣、写真、旅行、園芸、カラオケなどを楽しんでいらっしゃる方は話題が沢山ありと存じます。作品を提供頂けるものは誌上

## 謹 賀 新 年

平成 七 年 元 旦

◎本会役員及び篤志会員

|      |       |      |       |
|------|-------|------|-------|
| 顧問   | 栗林徳五郎 | 篤志会員 | 田代章一  |
| 相談役  | 大給湛子  |      | 土屋太郎  |
| 会長   | 佐藤宗丕  |      | 徳原徳子  |
| 常任幹事 | 佐竹エス  |      | 並木進   |
| 同    | 昼間楽平  |      | 長谷川栄次 |
| 同    | 荒木常子  |      | 長谷川敏  |
| 同    | 石谷典夫  |      | 浜松恒雄  |
| 同    | 内海淑子  |      | 本埜和昭  |
| 同    | 黒川芳誠  |      | 松平永芳  |
| 同    | 高林芳夫  |      | 村瀬松雄  |
| 同    | 山口良二  |      | 森山喜久雄 |
| 同    | 栗原利雄  |      | 山村喜久要 |
| 同    | 高橋鎮夫  |      | 横溝幸四郎 |
| 同    | 石井清   |      |       |

に紹介したいと思えます。23頁の『お元気ですか』アンケートにも皆様の活発な回答をお待ちいたします。

☆会費完納のおねがい  
本会の活動に必要な経費はすべて会員と会友の浄財だけで賄われており、他からの補助等は一切ありません。会費を長く続けてゆくためには財政の安定が是非とも必要でありますので、会費の完納にご協力下さい。

今後は会費を納めない方は退会の申し入れがあったものとして、会員名簿

から削除し、会報『環礁』の発送を中止しますので、御了承下さい。但し、特別の御事情のある方とは個別に御相談したいと思えますので、御遠慮なくお申出下さい。

### 本 部

〒103 東京都中央区日本橋人形町  
一―八―二(泉商事ビル)

### マーシャル方面遺族会

電話 〇三―三六六一―八七六〇  
FAX 〇三―三六六一―六二四一